

高松市東部運動公園(仮称)整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第1冊

奥の坊遺跡群 I
(奥ノ坊地区(試掘))
(奥大空坊地
金川古掘墳
古墳)

1999. 3

高松市教育委員会



調査地全景

はじめに

近年、連日のように遺跡発掘のニュースがマスコミを賑わし、我々の歴史への興味とロマンを掻き立ててくれます。そのニュースの多くは、「新発見」であったり、「最古」、「最大」であったりします。昨日までの歴史的常識が一夜にして変わってしまうことも多々あります。

近年の調査例をあげますと、日本海側で数多くの発見があったように思われます。加茂岩倉遺跡での銅鐸発見、上淀廃寺の壁画は色鮮やかなものでした。佐賀県で邪馬台国論争の火を再燃させたのは、吉野ケ里遺跡でした。奈良県の黒塚古墳では、三角縁神獣鏡が数多く見つかり、3万人の見学者が詰めかけました。青森県の三内丸山遺跡も記憶に新しいものです。毛皮をまとい、手に槍を持ち鹿や猪を追いかける縄文人のイメージは一変させられました。

これらの発見の多くは、公共工事などの開発の事前調査によるものです。特に三内丸山遺跡は運動公園整備の事前調査として行われた発掘調査で重要な発見が相次ぎました。今回の調査地であります奥ノ坊地区についても高松市東部運動公園(仮称)の整備が予定されています。広範囲を綿密な調査を行うことによって、数多くの新発見が期待されます。

それにしても、吉野ケ里遺跡、三内丸山遺跡、加茂岩倉遺跡など、これまで歴史の表舞台に出ることがなかった地域にこれほどのものが眠っていようとは、わが国の文化の奥深さと多様性に驚きと畏敬の念を禁じ得ません。

遺跡発掘は、歴史研究や文化の発展に役立つのはもちろん、独自の地域の歴史的・地理的特性を明らかにすることにより、独自の都市計画にも非常に役立ちます。地域に豊かで潤いのある雰囲気を作り出すとともに、様々な交流・良好なコミュニティ・活気を生み出し、地域の活性化につながります。地域文化に対する市民の関心の高まりにつれて、考古学に対する期待はふくらむ一方です。これからも、郷土の歴史や文化を生かしたより豊かな町づくりを進めていきたいものです。

平成11年3月

高松市教育委員会
教育長 山口素次

例 言

1. 本報告書は、高松市東部運動公園(仮称)整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第1冊で、運動公園整備予定地内の試掘調査の報告を収録した。また、あわせて、平成7年度において調査した大空古墳(おおそらこふん)、金川瀬古墳(かながわぶちこふん)の報告も収録した。

2. 調査地および調査期間は次のとおりである。

試掘調査	調査地	香川県高松市高松町奥ノ坊、大空、金川瀬	
		調査期間	第1次 平成7年8月4日～平成7年8月8日
			第2次 平成7年12月4日～平成8年2月13日
			第3次 平成8年7月18日～平成8年8月1日
			第4次 平成8年11月8日～平成8年12月12日
			第5次 平成9年10月7日～平成9年10月8日
大空古墳	調査地	香川県高松市高松町大空	
	調査期間	平成8年2月14日～平成8年2月23日	
金川瀬古墳	調査地	香川県高松市高松町金川瀬	
	調査期間	平成8年2月26日～平成8年3月8日	

3. 現地調査および出土遺物について下記の諸機関および方々から有益な御教示を得た。記して謝意を表したい。(順不同・敬称略)

香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財調査センター 地元自治会
 丹羽佑一(香川大学) 片桐孝浩・信里芳紀((財)香川県埋蔵文化財調査センター)
 牛嶋茂(奈良国立文化財研究所) 日下雅義・大久保徹也(徳島文理大学)
 国木健司(香川県立香川中央高等学校)

4. 現地調査から遺物整理、本書作成に至るまで下記の方々の御協力を得た。(順不同・敬称略)

末光甲正・中西克也(讃岐文化遺産研究会) 松田重治(仏教大学)
 坂東祐介・信吉純恵(徳島文理大学) 山内康郎(桃山学院大学) 大野宏和(花園大学)
 十河佐千子・吉本和哉(香川大学)

5. 本報告書掲載遺跡の調査および整理作業は、高松市教育委員会文化振興課文化財専門員大嶋和則が行った。

6. 本書の編集はは大嶋が行い、その執筆分担は下記のとおりでである。

第2章第1節・第2節…大野 その他…大嶋

7. 遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した。

縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器……白

瓦質土器……スクリーントーン

須恵器……黒

8. 本文の挿図中で国土地理院発行の2万5千分の1地形図「高松北部」「高松南部」「五剣山」「志度」を一部改変して使用した。

9. 発掘調査で得られた資料のすべては、高松市教育委員会で保管している。活用されたい。

10. 今回の調査地である奥ノ坊地区は「奥ノ坊」「奥の坊」「奥之坊」等の表記の仕方がある。地区名(字名)については「奥ノ坊」がよく使われるが「奥の坊」も使われる。近世文書では「奥ノ坊」に加え「奥之坊」が使われているが、現在では地元の人は使わない。国土地理院の地形図には「奥之坊」が使用されている。本報告書では地区名を「奥ノ坊」と表記し、古墳についても「奥ノ坊」と表記をする。集落遺跡については古墳と区別するために「奥の坊」と表記する。

目 次

はじめに

例言

奥ノ坊地区 1

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過 3

第2節 調査の経過 3

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境 9

第2節 歴史的環境 9

第3節 大空遺跡について 13

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法 35

第2節 調査の結果 36

第3節 各埋蔵文化財包蔵地の概要 44

第4節 まとめ 53

大空古墳 57

金川湖古墳 63

写真図版 69

報告書抄録 81

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	7
第2図	周辺遺跡分布図	11
第3図	大空遺跡周辺図	13
第4図	昭和29年土器出土状況図	13
第5図	大空遺跡出土弥生土器実測図1	15
第6図	大空遺跡出土弥生土器実測図2	16
第7図	大空遺跡出土弥生土器実測図3	17
第8図	大空遺跡出土弥生土器実測図4	18
第9図	大空遺跡出土弥生土器実測図5	19
第10図	大空遺跡出土弥生土器実測図6	20
第11図	大空遺跡出土弥生土器実測図7	21
第12図	大空遺跡出土弥生土器実測図8	22
第13図	大空遺跡出土弥生土器実測図9	23
第14図	大空遺跡出土弥生土器実測図10	24
第15図	大空遺跡出土弥生土器実測図11	25
第16図	大空遺跡出土弥生土器実測図12	26
第17図	採土場A地点断面露頭竪穴住居(SH-01)土層断面図	32
第18図	竪穴住居(SH-01)出土遺物実測図	32
第19図	B地点表採遺物実測図	33
第20図	埋蔵文化財包蔵地位置図	37
第21図	大空遺跡出土遺物実測図	44
第22図	A地区出土遺物実測図	45
第23図	B地区出土遺物実測図①	46
第24図	B地区出土遺物実測図②	47
第25図	B地区出土遺物実測図③	48
第26図	C地区出土遺物実測図	49
第27図	奥ノ坊2号墳周辺試掘トレンチ平面図	51
第28図	H～J地区出土遺物実測図	52
第29図	大空古墳位置図	59
第30図	大空古墳平面図	60
第31図	大空古墳断面図	60
第32図	大空古墳石室平・立面図	61
第33図	金川湖古墳位置図	65
第34図	金川湖古墳平面図	66
第35図	金川湖古墳断面図	66
第36図	金川湖古墳石室平・立面図	67
第37図	SK-01断面図	67

挿 表 目 次

表 1	整理作業行程表	5
表 2	大空遺跡出土弥生土器観察表(1)	27
表 3	大空遺跡出土弥生土器観察表(2)	28
表 4	大空遺跡出土弥生土器観察表(3)	29
表 5	大空遺跡出土弥生土器観察表(4)	30
表 6	大空遺跡出土弥生土器観察表(5)	31
表 7	大空遺跡表採資料観察表	34
表 8	試掘トレンチ一覧表No.1	39
表 9	試掘トレンチ一覧表No.2	40
表10	試掘トレンチ一覧表No.3	41
表11	試掘トレンチ一覧表No.4	42
表12	試掘トレンチ一覧表No.5	43
表13	出土遺物観察表①	54
表14	出土遺物観察表②	55
表15	出土遺物観察表③	56

写真図版目次

1. 調査風景(機械掘削)	71
2. 調査風景(人力掘削)	71
3. 大空遺跡現況	72
4. 大空北遺跡遺構検出状況	72
5. 奥の坊奥池西遺跡遺構検出状況	73
6. 奥の坊権現前遺跡遺構検出状況	73
7. 奥の坊遺跡遺構検出状況	74
8. 奥の坊遺跡遺構検出状況	74
9. 奥の坊遺跡上器棺出土状況	75
10. 奥の坊遺跡出土土器棺	75
11. 大空古墳石材露出状況(南から)	76
12. 大空古墳石材露出状況(北から)	76
13. 大空古墳作業風景	77
14. 大空古墳完掘状況(東から)	77
15. 大空古墳墓道土層断面(東から)	78
16. 金川淵古墳石材露出状況(北から)	78
17. 金川淵古墳完掘状況(南から)	79
18. 金川淵古墳SK-01土層断面(北から)	79

奥ノ坊地区
(試掘調査報告)

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

高松市においては、市民のスポーツレクリエーションニーズに応えるべく、市内各所において公園緑地や社会体育施設の整備を行ってきた。しかし、市東部には市民のスポーツ活動拠点が未整備であるとともに、全市的なレベルでのまとまった総合的なスポーツレクリエーション活動拠点もない。このような状況をふまえ、市東部の丘陵地で、総合的かつ全市民に求められる運動公園像の整備を行うための「高松市東部運動公園(仮称)基本構想・基本計画」が平成5年度に作成された。

運動公園整備予定地としてとりあげられたのは、高松市の東端の丘陵地帯、奥ノ坊、大空、金川洞の地区で、総事業面積は47.2haに及ぶ広大なものであり、当該地には香川県の弥生後期を代表する大空遺跡をはじめ、いくつかの埋蔵文化財が存在することが判明していた。また、周知以外の埋蔵文化財存在の可能性も十分見込まれた。基本計画の発表に伴い、工事に先立ち当該予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、高松市教育委員会と高松市公園緑地課との間で協議がなされ、記録保存の方向が決定された。

これを受けて、高松市教育委員会では、当該予定地内の分布状況および遺跡の範囲を確定する目的で、原因者負担において当該地の試掘調査を平成7年度より用地買収の進捗に合わせて順次行うこととなった。

上記の経緯により、平成7年8月4日より第1次試掘調査に入り、第5次試掘調査まで、実働70日にわたる試掘調査を実施した。

(「高松市東部運動公園(仮称)基本構想・基本計画」より一部抜粋)

第2節 調査の経過

1. 試掘調査の経過

高松市東部運動公園(仮称)整備予定地は、高松市高松町に所在する。試掘調査は土地の買収状況に応じて5次に分けて実施した。平成7年度より調査を開始し、平成9年度までの3ヶ年を要した。調査期間、調査体制は次のとおりである。調査の経過は後の調査日誌抄を参照されたい。

調査期間

第1次試掘調査	平成7年8月4日～平成7年8月8日(103～108 Tr)
第2次試掘調査	平成7年12月4日～平成8年2月13日(1～102 Tr)
第3次試掘調査	平成8年7月18日～平成8年8月1日(109～121 Tr)
第4次試掘調査	平成8年11月8日～平成8年12月12日(122～200 Tr)
第5次試掘調査	平成9年10月7日～平成9年10月8日(201～203 Tr)

調 査 日 誌 抄

平成7年

- 8月5日(晴) 第1次調査開始。
- 8月7日(晴) 奥ノ坊2号墳発見。
- 12月4日(曇) 第2次調査開始。大空古墳発見。
- 12月13日(晴) 大空遺跡周辺の調査。ピットを確認。弥生後期土器片、石鏃等出土。
- 12月22日(晴) 婆ヶ谷池北東部分の調査。近世火鉢出土。

平成8年

- 1月9日(雪) 金川淵古墳発見。
- 1月11日(晴) 旧女鉢宮社周辺の調査。遺構は認められなかった。
- 7月18日(晴) 第3次調査開始。18～19世紀の肥前系染付甕出土。
- 7月19日(雨) 台風のため作業中止。
- 7月23日(晴) 弥生土器、瓦器などが流土中より出土。
- 11月8日(曇) 第4次調査開始。奥ノ坊地区の谷部分で弥生中期の土器を多量に発見。さらに上部では柱穴等を確認した。(奥の坊遺跡)
- 11月18日(曇) 須恵器片や土師器片に伴い遺構を確認。(奥の坊権現前遺跡)
- 11月22日(晴) 婆ヶ谷池南西部分において弥生後期の土器棺が山上。(奥の坊遺跡)
- 11月28日(晴) 土坑1基と溝1条を確認した。(奥の坊奥池西遺跡)
- 12月4日(曇) 溝状の遺構を検出。遺物中には縄文後期の土器片も含まれる。(大空北遺跡)

平成9年

- 10月7日(晴) 第5次調査。弥生土器出土。

発掘調査従事者

岩田明	植田ヒロ子	植田正弘	榎内義照	榎内久子	榎内万恵
太田佐智子	太田シズエ	太田登	加藤アイ子	喜岡茂	高木繁夫
谷川幸子	谷川正数	坂東祐介	星野忠義	星野久子	星野マサエ
松本茂喜	山内康郎				

2. 整理作業の経過

整理作業は、平成9年1月より、調査の進捗に合わせて順次行った。整理作業の状況は次のとおりである。

表1 整理作業行程表

	平成9年												平成10年									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
基礎整理	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■										
実 測								■	■	■	■	■										
トレース											■	■	■	■	■							
原稿執筆														■	■	■	■	■	■	■	■	■
編 集																			■	■	■	■

整理作業従事者

井口夫美子

大川玲子

出石真理子

山崎里枝

青木小百合

森澤潮美

信古純恵

山内康郎

坂東祐介

十河佐千子

大野宏和

吉本和哉



第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県のおぼ中央、瀬戸内海に面している。高松市域の大部分は高松平野によって占められている。この平野部は四国中央部に東西に連なる讃岐山脈に端を発する中小河川により形成された沖積地である。高松平野は東を立石山、雲附山等に、南を日山、上佐山、西を五色台山塊に遮られ、北に瀬戸内海を望み位置しており、南北約20km、東西約16kmを測る。平野の境界を画する低位山塊及び屋島、紫雲山等の独立山塊は、浸食の容易な花崗岩層（三疊層群）が風化浸食に抵抗の強い安山岩層に覆われていたことによって浸食解析から取り残されて形成されたメサまたはビュートと呼ばれるもので、讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。

高松平野には、西から本津川、香東川、春日川、新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流しているが、平野形成の大部分は塩江町に源を発する香東川に負っている。本調査区の位置する高松町は、この中の春日川、新川にほど近い地域である。春日・新川の両河川は水量に乏しく、西側の香東川のように大規模な扇状地は見られない。その流域一帯は、自然堤防地帯と三角州地帯で、茶臼山・久米山付近で分けられるようである。また、高松町の北部は、江戸時代初期の開拓により陸地化されたものであり、寛永10(1633)年の『讃岐国絵図』によると、その頃の海岸線はかなり内陸に入り込んでおり、屋島は島として描かれている。北を屋島に面した沿岸（旧地形による）、東を立石山山塊、南を久米山丘陵、西を新川によって限られた高松平野の一角は、古代・中世を通じて「高松」（讃岐国山田郡高松郷）と呼ばれたが、天正16(1588)年の生駒親正による高松城築造以後は、城下高松に対して「古高松」と呼称されてきた。江戸時代以前の古高松の地形が推定可能な史料として香西成資が享保4(1719)年に成立させた『南海通記』がある。その中に天正10(1582)年頃の地形として「…春日ノ里ニ至ル、此所ハ屋島山、石清尾山兩受ノ間、入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル、遠干潟ナ春日里ト木太郷ノ間、海ノ中道アツテ通用ス。…」と記載している。ここでいう小山とは、現在の高松市新田町小山にあたると思われる。この小山近辺まで海岸線あるいは河口が湾状に入り込んでいたと想定できる。さらに現在の地形・標高や、条田地割の名残りの有無、遺跡の分布等から推測すると、近世以前には久米池付近まで満潮時には潮が差し込んでいたという想定もできるであろう。

今回、高松市東部運動公園（仮称）建設に伴う整備事業において調査の行われた公園予定地の、奥ノ坊、大空、金川湖地区は高松市の北東部にあたり、地形的には古高松地区と牟礼町にまたがる標高100～200mの山塊の、西側低丘陵地の尾根及び谷部に位置する地域である。

第2節 歴史的環境

本調査地区は高松平野の東部にあたり、北西部に位置する石清尾山塊と共に遺跡の多い地帯として早くから認識されてきた。しかし、中央部の遺跡についてはやや不明瞭であった。しかし、高松平野では、昭和60年代に入って高松東道路建設、太田第2土地区画整理事業、空港跡地再開発などの大規模プロジェクトに伴い埋蔵文化財の確認調査ならびに事前発掘の件数が増

大したことによって遺跡数は飛躍的に増大しつつある。また新たな遺跡の発見と併せて、香東川の旧河道が平野の形成に大きな影響を及ぼしていた事実も次第に明らかになってきた。今後、本確認遺跡の把握と保護に加えてこれまでの調査成果を時間的、空間的に結びつけて高松平野の歴史的環境の変遷を復元する作業が新たに必要になってきている。

調査地区周辺の遺跡の大部分は弥生時代から古墳時代にかけてのものであるが、旧石器時代、縄文時代の遺物、遺構も若干知られている。旧石器時代については、本格的な遺構は知られていないが久米池南遺跡(東山崎町)においてナイフ型石器が見つかった。縄文時代については、小山・南谷遺跡において落とし穴状の上杭が14基見つかった。落とし穴遺構の検出例は少ないので、今後の研究の良い資料となるだろう。他に縄文時代の遺構はないが、近年平野部の発掘調査において縄文晩期を中心とした遺跡山上例の増加が特筆でき、林・坊城遺跡、谷・長池遺跡、谷・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、居石遺跡、上天神遺跡などをあげることができる。これらの多くは旧河道の堆積から遺物の出土が確認されたものであるが、井手東Ⅰ遺跡では遺物の確認はなかったものの、地表下約70cmからアカホヤの堆積層が確認されており、縄文中期の高松平野の形成過程をうかがうことができる。

弥生時代の遺跡としては、久米山東側丘陵上に中期後半を中心とする久米池南遺跡があり、後期前半からは、大空遺跡、スベリ山南遺跡、南谷遺跡、小山・南谷遺跡がある。この中の、大空遺跡は香川県の弥生時代後期前半の標式土器が出土した遺跡で、1平方メートルにも満たない極めて限られた範囲から、甕・壺・高坏・鉢・製塩土器・器台等64個体分の資料が、昭和29年地元の小学生などにより発見された。だが紛失したものもあり、現存する土器は53点である。南谷遺跡においても大量の後期土器や製塩土器が発見されている。また小山・南谷遺跡においても製塩土器などが出土している。現在行われている高松市東部運動公園(仮称)整備予定地の調査でも製塩土器が大量に出土しており、この地域での土器製塩活動の一端を知る良い資料となるだろう。

古墳時代になると、集落遺跡は発見されていないが、平野中央部などでは空港跡地遺跡、上天神遺跡などで前期初頭まで集落が存在していたことが確認されている。また、太田下・須川

周辺遺跡一覧表(第2図参照)

- | | | | |
|--------------|--------------|------------|-------------|
| 1. 屋島城跡 | 2. 東山地2号墳 | 3. 金刀比羅社古城 | 4. 湯の谷1号墳 |
| 5. 湯の谷2号墳 | 6. 湯の谷3号墳 | 7. 喜岡城跡 | 8. 奥ノ坊古墳 |
| 9. 長尾1号墳 | 10. 長尾2号墳 | 11. 長尾3号墳 | 12. スベリ古墳 |
| 13. 大空遺跡 | 14. 大空南遺跡 | 15. 新田本村遺跡 | 16. 小山・南谷遺跡 |
| 17. 南谷遺跡 | 18. 岡山小古墳群 | 19. 山下古墳 | 20. 山下廃寺 |
| 21. 岡山古墳群 | 22. 丸山1号墳 | 23. 丸山2号墳 | 24. 大谷山古墳 |
| 25. 漆谷1号墳 | 26. 漆谷2号墳 | 27. 漆谷3号墳 | 28. 久本古墳 |
| 29. 久本山東峰古墳 | 30. 久米池遺跡 | 31. 久米池南遺跡 | 32. 北山古墳 |
| 33. 滝本神社東2号墳 | 34. 滝本神社東1号墳 | 35. 滝本神社古墳 | 36. 東谷池遺跡 |
| 37. 高松市茶臼山古墳 | 38. 陵山古墳 | 39. 新池遺跡 | 40. 岡崎神社古墳 |
| 41. 田楽古墳 | 42. 平石山頂古墳 | 43. 羽間遺跡 | 44. 風呂谷古墳 |
| 45. 立石塚 | 46. 椿寺古墳 | 47. 深谷古墳 | |



第2図 周辺遺跡分布図

遺跡では古墳時代中期の遺構を検出している。古墳としては、第一に前期古墳の高松市茶臼山古墳があげられる。全長 60 m の前方後円墳で、後円部には竪穴式石室が 2 箇所設けられており、第 1 主室と名付けられた竪穴式石室からは鍬形石 2 点、岡文帯神獸鏡 1 点などが出土している。鍬形石は県内唯一の出土例で、その石室構造とともに畿内的な特徴を持った古墳との評価を受ける要素の一つとなっている。また高松市茶臼山古墳に続く、前期から中期にかけての茶臼山古墳群、諏訪神社古墳、後期の久本古墳、小山古墳、山下古墳、瀧本神社古墳、岡山小古墳群、平尾古墳群といった古墳が引き続いて築かれていく。後期の久本古墳は讃岐唯一の石棚を設けた横穴式石室で、出土品として承台付銅椀、石棚直下に置かれた亀甲型陶棺等があり、古墳時代後期の首長墓の格式を持つ古墳としてよいだろう。

古代においては、山下廃寺がある。古式の瓦を出土していることが知られているが、発掘調査は行われていないので詳細は不明である。山下廃寺は地域単位の後期古墳群の分布と一致する傾向が強いことから、古墳時代後期から古代への転換期に地域単位の造墓集団が寺院建築への転換を図ったものと考えられる。新田本村遺跡と小山・南谷遺跡では高松平野の条里地割に先行し、方向の異なる条里地割が発見されている。数多く建ち並ぶ掘立柱建物群とともに、興味ある発見と言えよう。また、北部に位置する屋島には『日本書紀』にも記載されている屋島城の存在が知られている。現在、史跡天然記念物屋島基礎調査事業として調査を行っており、今後の成果に期待したい。

引用文献

- 『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会 1989
『太田第 2 上地区図整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 境目・下西原遺跡』高松市教育委員会 1998
『高松市埋蔵文化財調査報告第 26 集 一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊 井手東 I 遺跡』高松市教育委員会 1995
『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡 I』香川県教育委員会 1997
『県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 小山・南谷遺跡』平成 5 年度香川県教育委員会 1994

参考文献

- 大嶋和則『大空遺跡出土弥生土器の概要』『高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～』高松市歴史資料館 1996
『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊 林・坊城遺跡』香川県教育委員会 1993
『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊 前田東・中村遺跡』香川県教育委員会 1995
『古高松郷土誌』古高松郷土誌編集委員会 1977

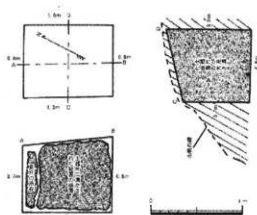
第3節 大空遺跡について

運動公園整備予定地内には、大空遺跡と呼ばれる周知の埋蔵文化財包蔵地が所在している。大空遺跡は、昭和29年7月に地元の小学生によって偶然発見された遺跡である。現地を調査した小竹一郎氏は弥生土器64個体分、石鏃1点、貝殻4点を発見しており、これを『高松市高松町すべり山出土弥生式遺物報告書』として発表している。この後、昭和36年に六車恵一、鎌木義昌の両氏により、『弥生式土器集成』で取り上げられると、「大空式」として、瀬戸内地域の弥生後期の土器群の1つとして広く学会に認知されるに至った。現在では、香川県の弥生土器を研究するにあたって欠かすことのできない資料となっている。

小竹氏の報告によると、高松市高松町大空の通称すべり山の山麓から約20m程度登った中腹で、約45度の傾斜を有する地点が遺物の出土地である。南北1.00m、東西0.80m、深さ0.70~0.90mの範囲内において土器をはじめとする遺物が密集して出土している。この出土状況から推測すると、土坑の一括資料である可能性が極めて高いと考えられる。遺構の北端部分には貝殻が存在し、その他の部分については、土器が折り重なるようにして出土している。小竹氏が発見した遺物は、昭和30年に高松市美術館に石鏃と土器の一部が移されたほかは、小竹氏自身が所蔵していたが、平成4年に全て高松市に寄贈されている。現在、美術館所蔵であった遺物も合わせて全て高松市歴史資料館において保管してあるが、



第3図 大空遺跡周辺図



第4図 昭和29年土器出土状況図

『高松市高松町すべり山出土弥生式遺物報告書』の挿図を一部改変

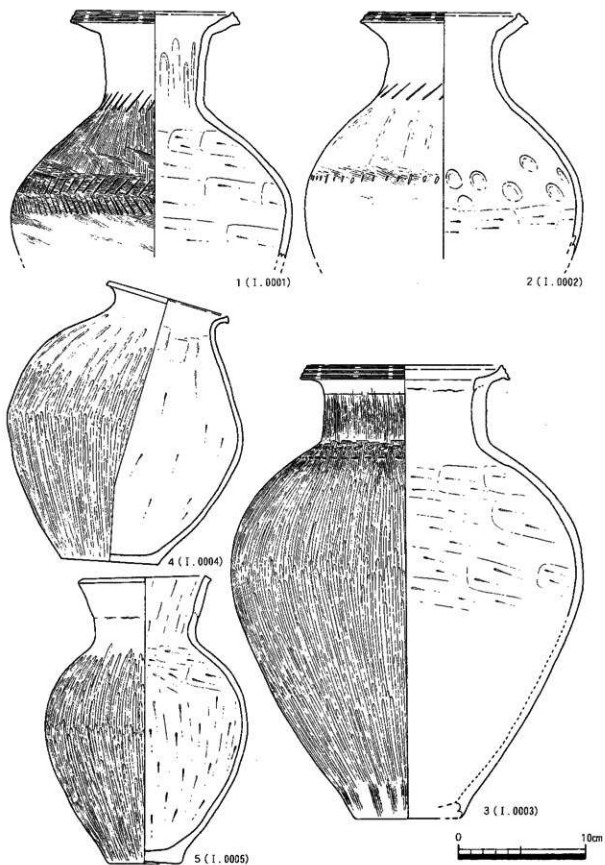
現存するものは53点である。この53点の土器については平成7年度に高松市歴史資料館が収蔵資料目録を作成するにあたり、再実測を行った。個々の遺物の説明や、傾向等については、『高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～』を参照されたい。今回、実測図と観察表を再掲載した。ここにあげた53点の土器は、平成10年6月、高松市指定の文化財に指定された。

このような、学史的に重要な遺跡であるにもかかわらず、昭和29年の土器発見地およびその周辺地域は、すでに花崗土の採土により、数m～数十m掘り下げられており、旧状をとどめていない。丘陵自体が消滅しているのである。これまで、現地での本格的な調査はなされておらず、遺跡の時期幅、性格などについては全く知られていなかった。しかしながら、平成7年に、花崗土の採土場の断面に、竪穴住居と思われる遺構が発見された。遺構は、斜面を水平にカットするように掘り込まれ、幅5.00m、深さ0.95mを測る。両端には壁溝らしき浅い落ち込みも認められた。床面直上には土器が数点認められ、弥生後期初頭のものであると思われる。この他、周辺で採集された土器片は、いずれも弥生後期初頭のものであると思われる。これによって、大空遺跡は丘陵上に立地する弥生後期の集落遺跡であることがうかがえるようになった。

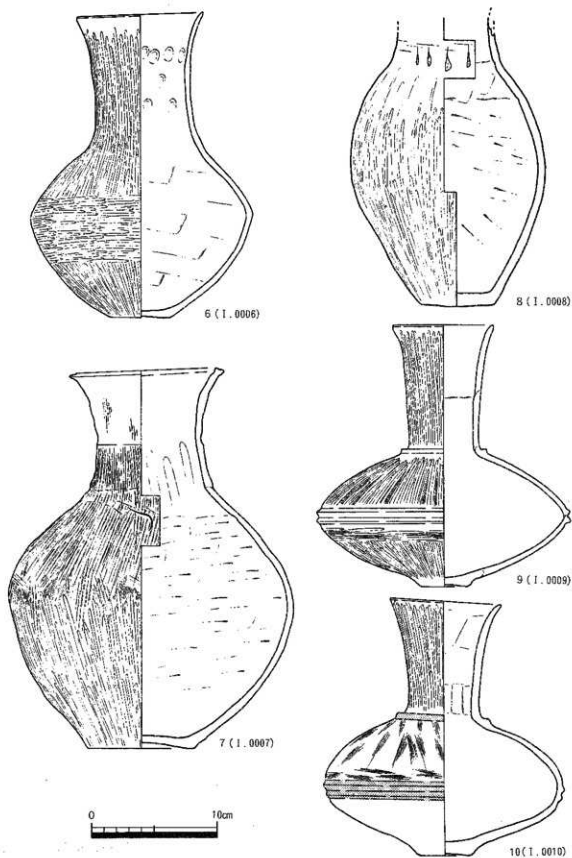
しかしながら、先述したように、残念なことに遺跡周辺は、花崗土の採土により人為的に大きく地形が変えられている。今回の開発事業においても、あらかじめ試掘調査を行ったが、ほとんどの地区で地盤が下げられており、検出できた遺構は土坑1基とピット1基のみで、遺物についても少量だけしか出土していない。このような状況から考えると、大空遺跡は南端の一部を除いてほぼ消滅してしまっていると考えられる。採土は現在も行われておらず、これ以上の遺跡破壊の進行はないと思われるが、今後、大空遺跡での資料増加は見込めないであろう。

（参考文献）

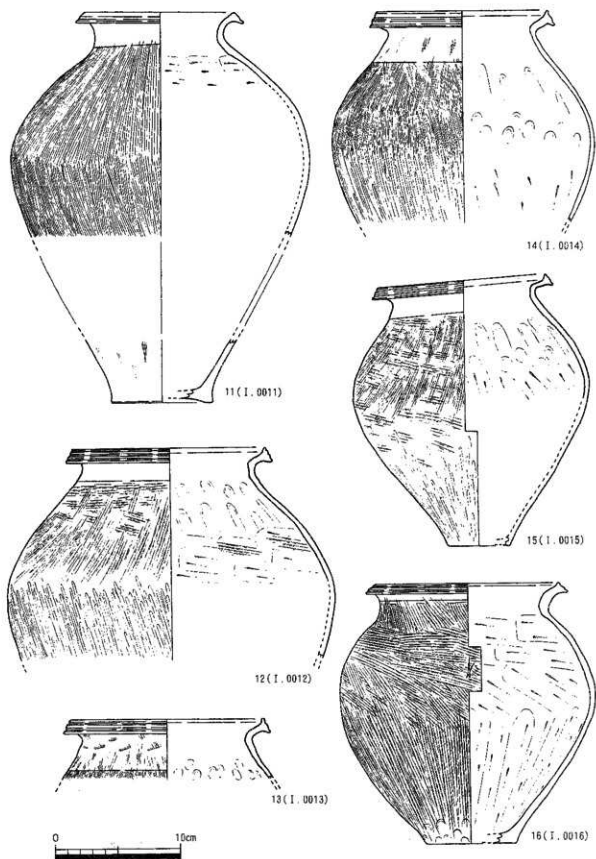
- 小竹一郎 『高松市高松町すべり山出土弥生式遺物報告書』 1955
鎌木義昌・六車恵一 「香川県高松市高松町大空遺跡の土器」『弥生式土器集成2』日本考古学協会 1961
川畑聡 『高松平野の考古学のあけぼの～小竹一郎旧蔵資料展～』 高松市歴史資料館 1994
大嶋和則 「大空遺跡出土弥生土器の概要」『高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～』
高松市歴史資料館 1996
大嶋和則 「奥の坊遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』 1996
大嶋和則 「大空遺跡の竪穴住居と表採資料について」『香川考古第6号』 1997



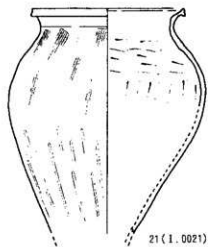
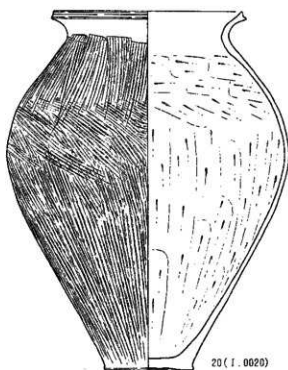
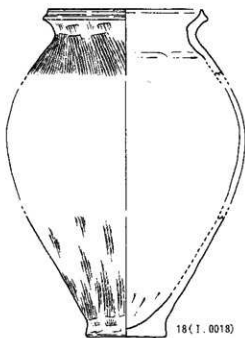
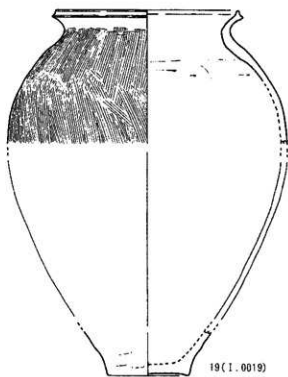
第5圖 大空遺跡出土弥生土器実測図1



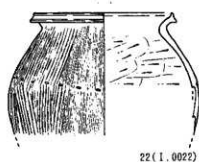
第6圖 大空遺跡出土弥生土器実測図2



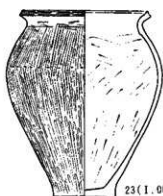
第7圖 大空遺跡出土弥生土器実測図3



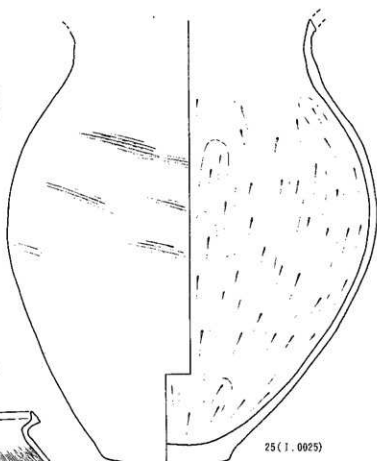
第8圖 大空遺跡出土弥生土器実測図4



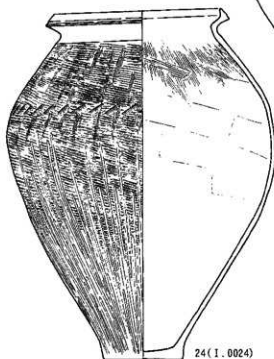
22 (I. 0022)



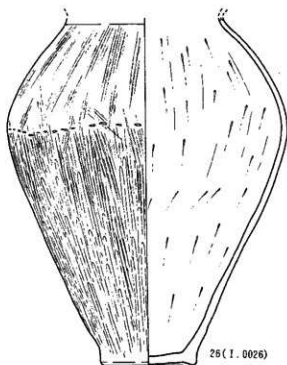
23 (I. 0023)



25 (I. 0025)



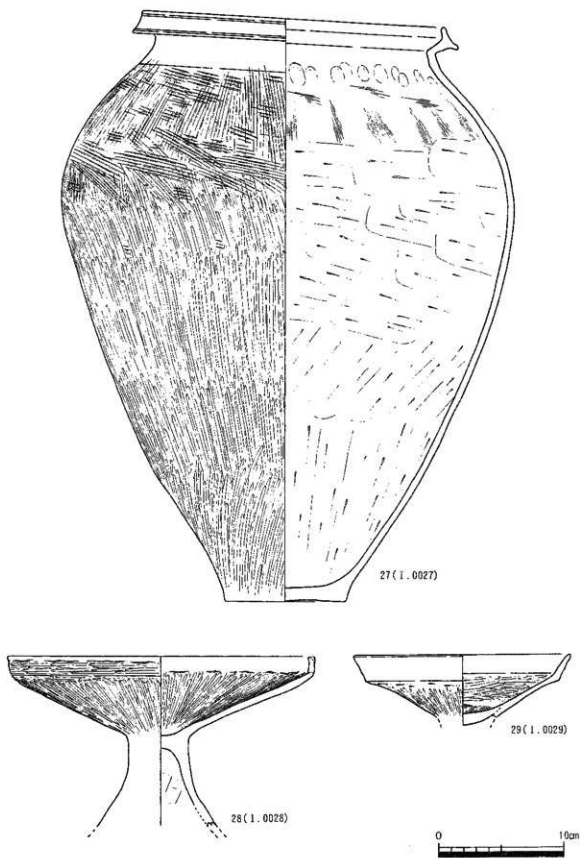
24 (I. 0024)



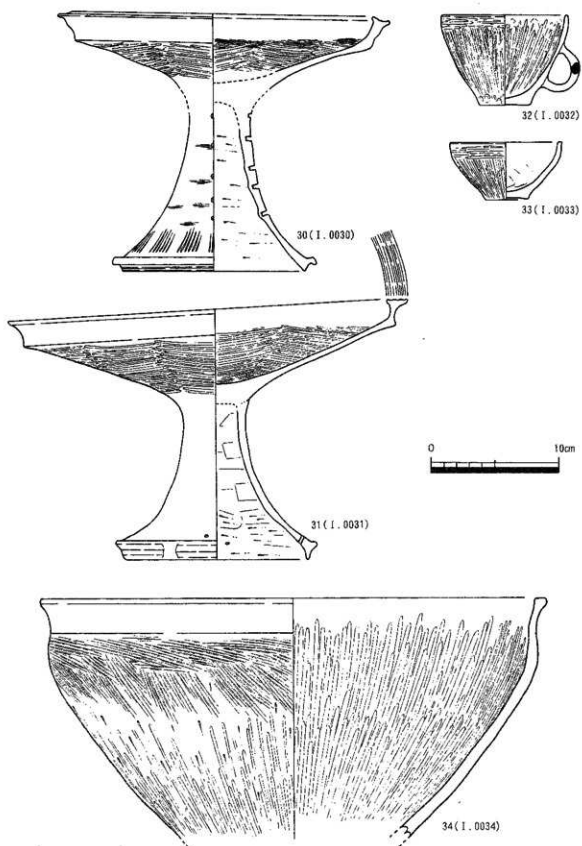
26 (I. 0026)



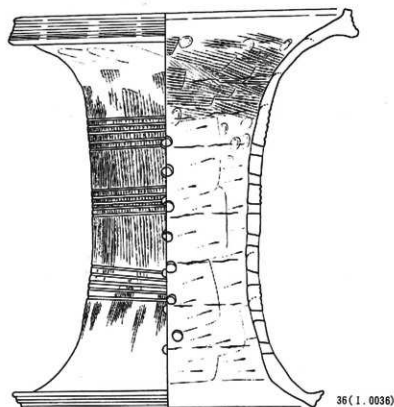
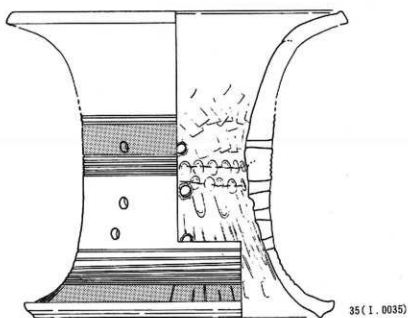
第9圖 大空遺跡出土弥生土器実測図5



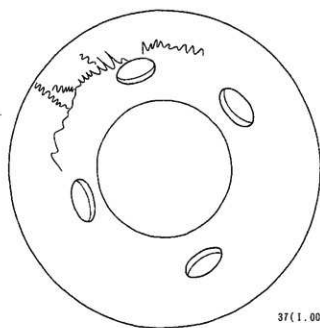
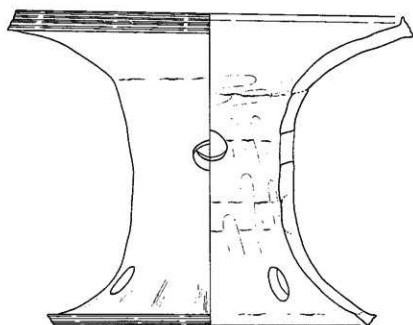
第10図 大空遺跡出土弥生土器実測図6



第11圖 大空遺跡出土弥生土器実測圖 7



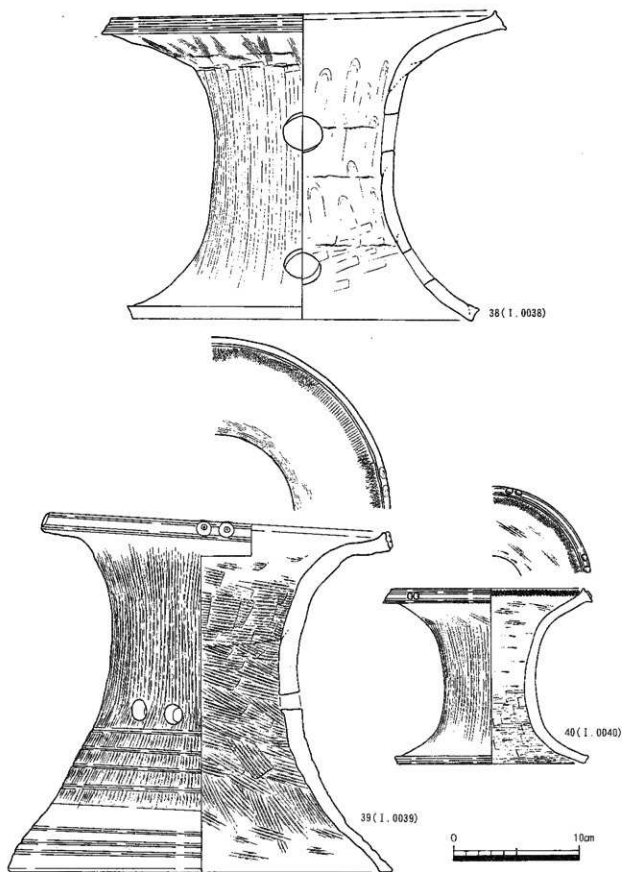
第12圖 大空遺跡出土弥生土器実測図8



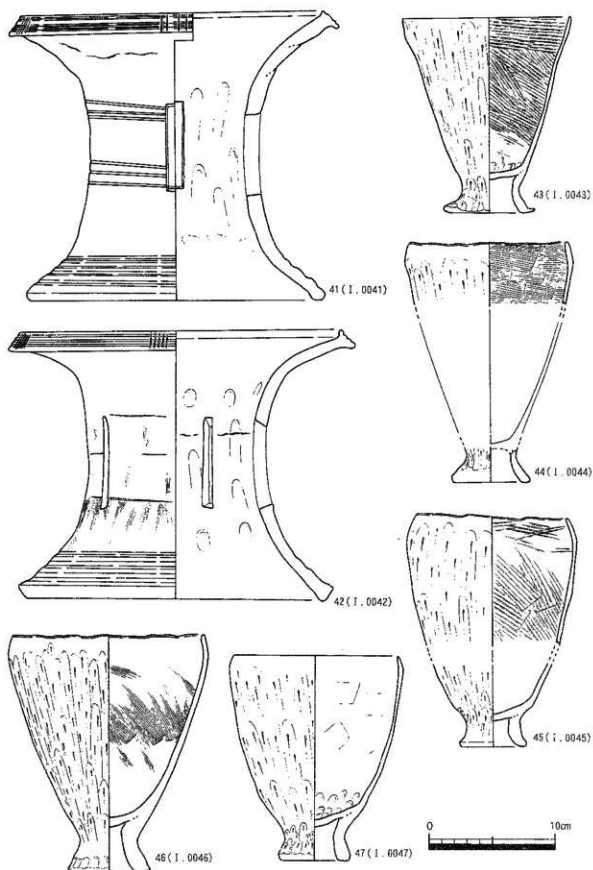
37 (1.0037)



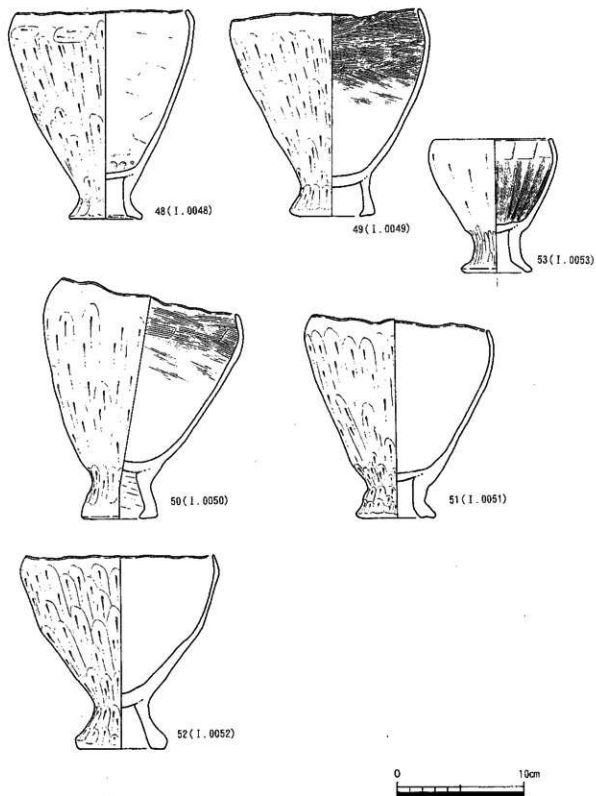
第13圖 大空遺跡出土弥生土器実測圖9



第14圖 大空遺跡出土弥生土器実測図10



第15図 大空遺跡出土弥生土器実測図11



第16图 大空遺跡出土弥生土器実測図12

大空遺跡出土弥生土器観察表(1)

番号	器種	法量(cm) 残存率	施文の特徴	成形及び調整方法	色 調	胎 土	焼 成	備 考
1	広口壺	口径 12.5 現在高19.3 口縁～体部上半 残る	口縁部に凹線2条 頸部・体部中央に刺 突文	口縁部～頸部 ヨコナデ 頸部内面 指頭ナデ 体部外面 タテハケ後ヨコハケ 体部内面 ヨコヘラケズリ	赤褐色 (5Y R 4/6)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	体部上 半に黒 斑
2	広口壺	口径 12.0 現存高19.4 口縁～体部上半 約1/3残る	口縁部に凹線2条 頸部に刺突文 体部中央に列点文	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面上半 タテヘラミガキ 体部外面下半 ヨコハケ 体部内面 ヨコヘラケズリ後 指頭正	にぶい 赤褐色 (2.5 Y R 4/4)	密 1mm以下の 石英・金雲 母含む	良好	
3	広口壺	口径 15.5 底径 8.2 器高 35.8 口縁部と体部の 1/4残る	口縁部に凹線3条 頸部～体部上半に列 点文	口縁部 ヨコナデ 頸部外面 粗いタテハケ 体部外面 粗いタテハケ後 タテヘラミガキ 体部内面 ヨコヘラケズリ	赤褐色 (5Y R 4/6)	やや密 1～2mmの 石英・長石 ・金雲母を 含む	良好	頸部に 接合痕
4	広口壺	口径 9.8 底径 7.6 器高 22.0 口縁部と体部 上半の一部を欠 く		口縁部 ヨコナデ 頸部内面 板ナデ 体部外面 タテヘラミガキ 体部内面 タテヘラケズリ 底部底面 ミガキ	褐色 (7.5 Y R 6/6)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	体部下 半に黒 斑
5	長頸壺	口径 9.8 底径 5.6 器高 22.6 口縁部と体部の 一部を欠く		口縁部～頸部 ヨコナデ 頸部外面 板ナデ 体部外面 タテヘラミガキ 体部内面 タテヘラケズリ	黄褐色 (10Y R 8/6)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	頸部に 接合痕
6	長頸壺	口径 9.9 底径 4.6 器高 24.2 体部の1/5を欠 く		口縁部～頸部 ヨコナデ 頸部外面 タテヘラミガキ 体部外面 タテ後ヨコヘラミガキ 体部内面 板ナデ 底部底面 ミガキ	にぶい 黄褐色 (10Y R 6/3)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	
7	長頸壺	口径 11.0 底径 8.4 器高 30.2 体部と口縁部の 一部を欠く	体部上半「フ」線刻	口縁部～頸部 ヨコナデ 頸部外面 やや粗いタテハケ 体部外面 タテハケ(細後祖)後 タテヘラミガキ 体部内面 ヨコヘラケズリ 底部底面 粗いハケ	浅黄褐色 (7.5 Y R 8/4)	やや密 2～3mmの 石英・長石 を含む	良好	体部下 半に黒 斑
8	長頸壺	底径 5.6 現存高22.8 口縁部を欠く	頸部に刺突文	頸部外面 板ナデ 体部外面 タテヘラミガキ 体部内面 板ナデ 体部内面下半 ヨコヘラケズリ	明赤褐色 (5Y R 5/6)	やや密 2～3mmの 石英・長石 を含む	やや良	頸部及 体部上 半に接 合痕
9	細頸壺	口径 9.8 底径 3.8 器高 20.6 体部の一部を欠 く		口縁部～頸部 ヨコナデ 頸部外面 タテヘラミガキ 体部外面 ヨコハケ後 タテヘラミガキ 突帯部分 ヨコナデ	にぶい 赤褐色 (5Y R 5/4)	密 2～3mmの 石英・長石 を含む	良好	頸部に 接合痕
10	細頸壺	口径 8.8 底径 4.0 器高 20.2 体部の一部を欠 く	突帯部分を赤色塗彩	頸部外面 タテヘラミガキ 頸部内面 板ナデ 体部外面 体部外面 突帯部分 ヨコナデ	にぶい 黄褐色 (10Y R 7/3)	密 1mm以下の 長石を含む	良好	体部中 央に黒 斑
11	広口壺	口径 11.8 底径 6.0 残存高①17.8 ②5.0 体部下半を欠 く	口縁部に凹線1条	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 タテハケ 体部内面 ヨコヘラケズリ	浅黄色 (2.5 Y 7/3)	やや密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	体部中 央は煤 化

大空遺跡出土弥生土器観察表(2)

番号	器種	法量(cm) 残存率	施文の特徴	成形及び調整方法	色調	胎土	焼成	備考
12	甕	口径 15.4 現存高 16.6 口縁部～体部上半 残る	口縁部に凹線 3 条	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 タタキ後粗いタテハケ後 タテヘラミガキ 体部内面 ヨコヘラケズリ後 粗いヨコハケ後指頭圧	にぶい 褐色 (7.5Y R 7/4)	密 1mm以下の 石英・雲母 を含む	良好	
13	甕	口径 15.5 現存高 4.8 口縁部約1/2残 る	口縁部に凹線 2 条	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 タテハケ 体部内面 指頭圧	にぶい 赤褐色 (5Y R 5/4)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	
14	甕	口径 13.6 現存高 18.3 口縁部～体部 上半約1/4が残 る	口縁部に凹線 2 条	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 タテハケ後 タテヘラミガキ 体部内面上半 指頭圧 体部内面下半 タテヘラケズリ	にぶい 褐色 (5Y R 6/4)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	
15	甕	口径 13.3 底径 4.8 器高 21.4 ほぼ完形	口縁部に凹線 2 条	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 タタキ後タテハケ後 タテヘラミガキ 体部内面 タテヘラケズリ後 指頭ナデ	にぶい 褐色 (7.5Y R 7/4)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	体部上 半に黒 斑 体部下 半及び 口縁部 は煤化
16	甕	口径 14.6 底径 7.0 器高 20.5 口縁部2/3を欠 く	口縁部に凹線 2 条 体部外面「×」線刻	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 粗いハケ 体部内面 ヘラケズリ	赤褐色 (2.5Y R 4/6)	やや密 2～3mmの 石英・長石 を含む	良好	
17	甕	口径 12.3 現在高17.0 口縁部～体部上 半約3/4、体部下 半1/6残る	口縁部に凹線 2 条	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 粗いタテハケ 体部内面 ヘラケズリ	にぶい 褐色 (5Y R 6/3)	密 1mm以下の 石英・長石 ・雲母を含 む	良好	体部上 半に黒 斑
18	甕	口径 12.2 底径 6.3 現在高全 5.3 ⑤ 9.5 口縁部1/4と底 部のみ残る	口縁部に凹線 1 条	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 粗いタテハケ 体部内面 ヘラケズリ	灰黄褐色 (10Y R 6/2)	やや密 2～3mmの 石英・長石 を含む	良好	
19	甕	口径 14.3 底径 6.2 現在高全10.7 ⑤ 3.5 口縁部～体部上 半と底部の1/4 残る	口縁部に凹線 1 条	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 タテハケ 体部内面 ヨコヘラケズリ	にぶい 赤褐色 (5Y R 5/4)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	
20	甕	口径 14.8 底径 6.8 器高 23.4 口縁部～体部上 半の1/2欠く	口縁部に凹線 1 条	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 粗いタテハケ 体部内面 ヘラケズリ	にぶい 褐色 (5Y R 6/4)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	
21	甕	口径 12.1 現在高17.7 底部と体部大半 の一部を欠く		口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面上半 粗いタテハケ 体部外面下半 タテヘラミガキ 体部内面 ヘラケズリ	にぶい 黄色 (2.5Y 6/3)	やや密 1～2mmの 石英・長石 ・雲母を含む	良好	体部上 半に黒 斑 著しい
22	甕	底径 11.0 現存高 9.6 口縁部～体部上 半約1/2残る	口縁部に凹線 1 条 体部上半に列点文	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 タテハケ (細・粗) 体部内面 ヨコヘラケズリ	灰褐色 (5Y R 5/2)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	体部上 半に黒 斑

大空遺跡出土弥生土器観察表(3)

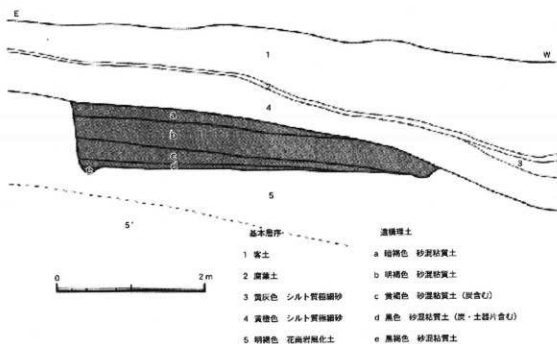
番号	器種	法量(cm) 残存率	施文の特徴	成形及び調整方法	色調	胎土	焼成	備考
23	甕	口径 10.0 底径 4.8 器高 14.7 体部の1/2を欠く	体部上半に列点文	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 粗いタテハケ後 タテヘラミガキ 体部内面 ヘラケズリ	褐色 (7.5 Y R 6/6)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	体部下 半に黒 斑
24	甕	口径 7.0 器高 27.5 口縁部を欠く	体部上半に列点文	体部外面 粗いタテハケ後 タテヘラミガキ 体部内面 タテヘラケズリ	にぶい 褐色 (7.5 Y R 6/3)	やや密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	体部中 央に黒 斑
25	甕	底径 10.2 残存高35.0 口縁部を欠く		体部外面 粗いハケ 体部内面 タテヘラケズリ	浅黄褐色 (2.5 Y 7/3)	やや粗 2～3mmの 石英・長石 を含む	やや軟	体部中 央に黒 斑、磨滅 著しい
26	甕	口径 13.2 底径 6.3 器高 27.8 体部の一部を欠く	口縁部に凹線1条 体部上半にハケ原状 による列点文	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 タタキ後粗いハケ後 タテヘラミガキ 体部内面 板ナデ後タテハケ	淡黄褐色 (10 Y R 8/3)	密 1mm以下の 石英・雲母 を含む	良好	口縁部 と体部 上半に 黒斑
27	甕	口径 24.0 底径 8.8 器高 46.5 ほぼ完形	口縁部に凹線1条	口縁部～頸部 ヨコナデ 体部外面 タタキ後粗いハケ後 タテヘラミガキ 体部内面 ヘラケズリ後ハケ後 指頭圧	褐色 (7.5 Y R 6/6)	密 1mm以下の 石英・長石 を含む	良好	体部下 半に黒 斑
28	高杯	口径 24.5 現存高13.3 脚部を欠く		口縁部 ヨコナデ 口縁部外面 ヨコヘラミガキ 杯部外面 タテヘラミガキ 杯部内面 タテヘラミガキ 脚部外面 ナデ 脚部内面 板ナデ	暗灰黄色 (2.5 Y 5/2)	密 1mm以下の 石英・長石 ・角閃石を 含む	良好	口縁部 ～杯部 にかけて 内外面 に黒斑
29	高杯	口径 17.2 現存高 5.5 杯部1/2残る		口縁部 ヨコナデ 杯部外面 ヘラケズリ後 タテヘラミガキ 杯部内面 ヨコヘラミガキ・粗いハケ 杯部 円盤充填	にぶい 黄褐色 (10 Y R 6/4)	やや粗 2～3mmの 石英・長石 ・角閃石を 含む	良好	口縁部に 黒斑
30	高杯	口径 23.8 底径 14.4 器高 20.4 脚部の一部を欠く	口縁部に凹線1条 脚柱部に竹筭文 楕圓部にヘラによる6 本の縦方向条線	口縁部 ヨコナデ 杯部外面 分割ヘラケズリ 杯部内面 ヨコハケ後 分割ヘラミガキ 脚部外面 ヨコハケ 脚部内面 ヨコヘラケズリ	赤褐色 (5 Y R 6/6)	密 1mm以下の 長石・金雲 母を含む	良好	脚部に 黒斑
31	高杯	口径 31.8 底径 14.5 器高 20.5 ほぼ完形	口縁部に凹線3条 楕圓部に凹線1条・小 型円形スキャン2個1 対4方	口縁部 ヨコナデ 杯部外面 分割ヘラミガキ 杯部内面 分割ヘラミガキ 脚部外面 ナデ 脚部内面上半 板ナデ 脚部内面下半 ヨコヘラケズリ	にぶい 褐色 (7.5 Y R 7/4)	密 1mm以下の 長石・雲母 を含む	良好	杯部内 面・脚 部に黒 斑
32	把手付 鉢	口径 9.8 底径 3.9 器高 7.1 口縁部の一部を 欠くがほぼ完形		口縁部外面 ヨコヘラミガキ 体部外面 粗いタテハケ後 タテヘラミガキ 体部内面 タテヘラケズリ後 タテヘラミガキ 底部外面 指頭圧	赤褐色 (2.5 Y R 4/6)	やや密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	
33	鉢	口径 8.7 底径 3.3 器高 4.0 口縁～体部下 9/10を欠く		口縁部外面 ヨコヘラミガキ 体部外面 タテヘラミガキ 体部内面 板ナデ 底部底面 ナデ	にぶい 褐色 (10 Y R 5/3)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	

大空遺跡出土弥生土器観察表(4)

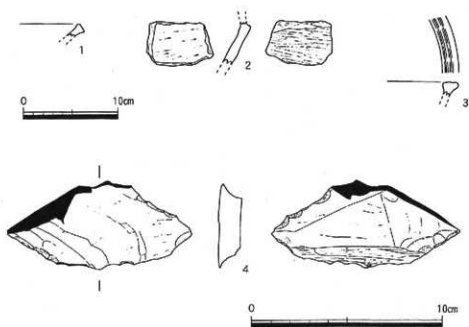
番号	器種	法量(cm) 残存率	施文の特徴	成形及び調整方法	色調	胎土	焼成	備考
34	鉢	口径 39.7 現在高19.0 口径～体部約 1/3が残る		口縁部 ヨコナデ 体部外面 タテヘラケズリ後 粗いハケ後 タテヘラミガキ 体部内面 タテヘラミガキ	明赤褐色 (5YR 5/6)	やや密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	体部中央に 黒斑
35	器台	口径 26.0 底径 22.5 器高 24.1 裾部の1/2と受 部の一部を欠く	筒部に円形スカシ 縦3個1対3方 縦4個1対2方 多条沈線 裾部にヘラによる3 ～5本の縦方向条線	杯部内面上半 板ナデ後指頭圧 杯部内面下半 板ナデ後 タテヘラミガキ 裾部 ヨコナデ	浅黄褐色 (10YR 8/3)	粗 1mm程の石 英・長石を 多く含む	良好	裾部黒 斑部 に接合 痕外面 剥離粗 と筒部 の一部 に赤色 塗色
36	器台	口径 25.3 底径 22.8 器高 31.7 裾部の受部の一 部を欠く	口縁部に凹線4条 筒部に多条沈線(5 条×3)・円形スカ シ縦7個1対4方 裾部に沈線2条	口縁部 ヨコナデ 筒部外面 粗いタテハケ 筒部内面上半 指頭圧後 粗いヨコハケ 筒部内面下半 ヨコヘラケズリ 裾部 ヨコナデ	明赤褐色 (5YR 5/6)	密 3～5mmの 石英・長石 を含む	良好	筒部と 裾部に 黒斑 筒部に接 合痕
37	器台	口径 30.8 底径 25.0 器高 24.7 完形	口縁部に凹線3条 筒部に大型円形スカ シ4方×2段 裾部内面にヘラによ る波状の線刻	口縁部 ヨコナデ 筒部内面 指頭ナデ 裾部外面 タテハケ	にぶい 褐色 (7.5YR 5/4)	やや粗 2～3mmの 長石を多く 含む	良好	筒部に 接合痕 内外面 とも磨 減著し い
38	器台	口径 30.6 底径 27.0 器高 24.5 裾部の一部を欠 くほぼ完形	口縁部に凹線2条 筒部に大型円形スカ シ縦2個1対4方	口縁部～受部内面 ヨコナデ 受部外面 タテハケ 筒部外面 板ナデ 筒部内面上半 指頭ナデ 筒部内面下半 板ナデ 裾部 ヨコナデ	にぶい 褐色 (5YR 6/4)	密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	口縁部 内外面 と裾部 に黒斑 筒部に接 合痕
39	器台	口径 26.7 底径 30.3 器高 28.4 裾部の一部を欠 く	口縁部に凹線2条・ 円形浮文 口縁部内面に幅16 本の波状文 筒部に円形スカシ2 個1対3方 筒部～裾部に凹線7 条	口縁部 ヨコナデ 筒部外面 粗いタテハケ 筒部内面 粗いヨコハケ 裾部 ヨコナデ	にぶい 赤褐色 (5YR 5/4)	やや粗 2～3mmの 石英・長石 を多く含む	良好	筒部に 接合痕
40	器台	口径 15.4 底径 14.8 器高 13.7 完形	口縁部に凹線2条・ 円形浮文 口縁部内面に幅1 5本の波状文	口縁部 ヨコナデ 筒部外面 粗いタテハケ 筒部内面上半 ヨコヘラケズリ後 粗いヨコハケ 筒部内面下半 ヘラケズリ後 ヨコヘラミガキ	にぶい 赤褐色 (5YR 5/4)	やや密 1～2mmの 石英・長石 を含む	良好	
41	器台	口径 24.3 底径 23.2 器高 22.8 完形	口縁部に凹線3条・ ヘラによる4～7本 の縦方向条線 筒部に沈線3条×2 長方形スカシ4方 裾部に凹線4条	口縁部 ヨコナデ 筒部外面 ナデ 筒部内面 指頭ナデ 裾部 ヨコナデ	にぶい 黄褐色 (10YR 7/4)	密 1mm以下の 石英・長石 を含む	良好	裾部内 面に黒 斑
42	器台	口径 25.6 底径 23.8 器高 21.3 完形	口縁部に沈線3条・ ヘラによる4～6本 の縦方向条線 筒部に沈線3条?・ 長方形スカシ5方 裾部に凹線3条	口縁部～受部 ヨコナデ 筒部外面 タテハケ 筒部内面 指頭圧・指頭ナデ 裾部 ヨコナデ	にぶい 黄褐色 (10YR 6/3)	やや粗 3～5mmの 石英・長石 を含む	良好	裾部に 黒斑 外面磨 減著し い

大空遺跡出土弥生土器観察表(5)

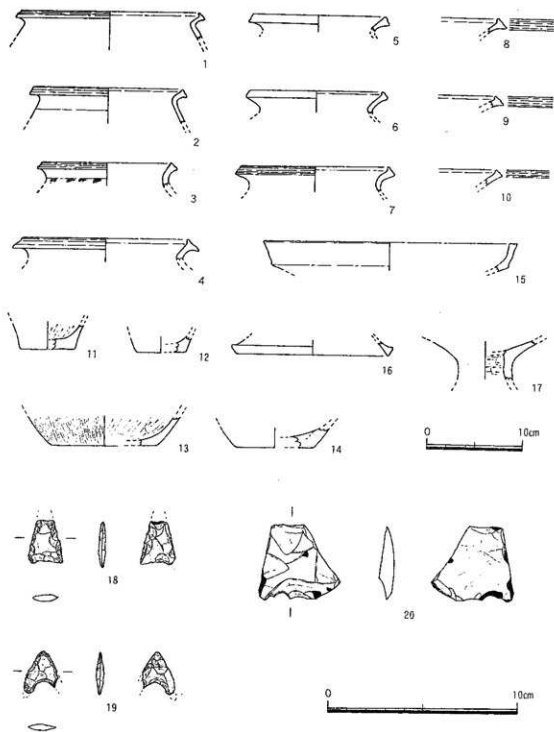
番号	器種	法量(cm) 残存率	施文の特徴	成形及び調整方法	色調	胎土	焼成	備考
43	製塩器	口径 13.3 底径 7.3 器高 15.5 口縁へ体部の 1/2を欠く		外面 タテヘラケズリ 体部内面 粗いヨコハケ 底部内面 指頭圧 脚部内面 ナデ	にぶい 黄褐色 (10Y R 7/3)	やや粗 2～3mmの 石英・長石 を含む	やや軟	
44	製塩器	口径 12.5 底径 5.8 現存高⑤ 5.0 ⑥ 2.8 脚部と口縁部の 一部残る		外面 タテヘラケズリ 体部内面 ヨコハケ 脚部内面 ナデ	淡黄色 (2.5Y 8/3)	やや密 2mm以下の 石英・長石 を含む	やや軟	
45	製塩器	口径 12.0 底径 5.0 器高 18.4 口縁部3/4と脚 部残る		外面 タテヘラケズリ 体部内面 粗いハケ 脚部内面 ナデ	にぶい 黄褐色 (10Y R 7/2)	やや密 1～2mmの 石英・長石 を含む	やや良	体部上 半に黒 炭
46	製塩器	口径 13.0 底径 5.4 現存高16.1 口縁部を欠く		外面 タテヘラケズリ 体部内面 板ナデ 底部内面 指頭圧 脚部内面 ナデ	にぶい 黄褐色 (10Y R 7/3)	粗 2～3mmの 石英・長石 を多く含む	やや軟	体部に 黒炭
47	製塩器	口径 15.2 底径 6.6 器高 18.6 約1/2残る		口縁部 ヨコナデ 体部外面 タテヘラケズリ 体部内面 タテハケ 脚部外面 ナデ・指頭圧 脚部内面 ナデ	にぶい 黄褐色 (10Y R 7/3)	やや粗 1mm以下の 石英・長石 を含む	やや良	
48	製塩器	口径 13.7 底径 5.6 器高 16.5 口縁部の一部を 欠くがほぼ完形		口縁部 ヨコナデ 体部外面 タテヘラケズリ 体部内面 指頭圧 脚部外面 指頭圧 脚部内面 ナデ 脚部底面 ヘラケズリ	にぶい 黄褐色 (10Y R 7/3)	やや粗 1～2mmの 石英・長石 ・雲母を多 く含む	良好	
49	製塩器	口径 14.9 底径 6.8 器高 16.4 体部の一部を欠 く		外面 タテヘラケズリ 体部内面上半 ヨコハケ 脚部外面下半 ナデ・指頭圧 脚部内面 ナデ	にぶい 黄褐色 (10Y R 7/4)	やや粗 2～3mmの 石英・長石 を多く含む	やや良	
50	製塩器	口径 14.1 底径 6.2 器高 19.0 体部の一部を欠 く		外面 タテヘラケズリ 体部内面上半 ヨコハケ 脚部外面下半 ナデ 脚部内面 ケズリ状ナデ	にぶい 黄褐色 (10Y R 6/3)	やや粗 3～5mmの 石英・長石 ・雲母を含 む	やや良	
51	製塩器	口径 14.0 底径 5.8 器高 16.1 口縁部の一部を 欠く		外面 タテヘラケズリ 体部内面 ナデ 脚部内面 ナデ 脚部底面 ケズリ	にぶい 黄褐色 (10Y R 6/3)	やや粗 1～2mmの 石英・長石 を多く含む	良好	脚部に 黒炭
52	製塩器	口径 15.0 底径 6.7 器高 15.2 約1/3残る		外面 タテヘラケズリ 体部内面 ナデ 脚部内面 ナデ	淡黄色 (2.5Y 7/3)	やや粗 1～2mmの 石英・長石 を多く含む	やや軟	口縁～ 脚部に 黒炭
53	製塩器	口径 9.3 底径 5.0 器高 10.5 脚部の一部を 欠く		口縁部内面 板ナデ 体部外面 タテヘラケズリ 体部内面 タテハケ 脚部外面 タテヘラミガキ 脚部内面 ヨコナデ	にぶい 黄褐色 (10Y R 7/3)	密 1mm以下の 石英・長石 を含む	良好	体部に 黒炭



第17図 探土場A地点断面露頭竪穴住居(SH-O1)断面図



第18図 竪穴住居(SH-O1)出土遺物実測図



第19图 B地点表探遺物実測図

表7 大空道跡表採資料観察表

番号	器種	法口径 底径 器高	調整	文様	色調	胎土	焼成
1	弥生土器 甕	1.6cm			黒 (10YR 1.7/1)	粗 (1~3mmの石英・長石・雲母を含む)	良
2	弥生土器 大型鉢	4.5cm	外面 ヨコヘラミガキ 内面 ヘラケズリ		にぶい黄褐色 (10YR 6/4)	やや粗 (1~2mmの石英・長石・雲母を含む)	良
3	弥生土器 高杯	1.7cm		口縁端部 凹線2条	にぶい褐色 (5YR 7/4)	やや密 (1mm以下の長石・雲母を含む)	良
5	弥生土器 甕	18.6cm 2.7cm		口縁端部 凹線1条	にぶい褐色 (7.5YR 6/4)	密 (1mmの長石・角閃石を含む)	良
6	弥生土器 甕	15.6cm 3.4cm		口縁端部 凹線1条	にぶい褐色 (7.5YR 6/4)	密 (1mm以下の長石を含む)	良
7	弥生土器 甕	13.6cm 2.5cm	外面 タテハケ		にぶい褐色 (5YR 6/4)	密 (1mm以下の長石・雲母を含む)	良
8	弥生土器 甕	22.4cm 3.2cm			褐色 (7.5YR 7/6)	やや粗 (1~2mmの石英・長石・雲母を含む)	良
9	弥生土器 甕	13.8cm 1.5cm			明赤褐色 (5YR 5/6)	密 (1mm以下の長石を含む)	良
10	弥生土器 甕	13.6cm 2.4cm			褐色 (7.5YR 6/6)	密 (1mm以下の長石を含む)	良
11	弥生土器 甕	15.2cm 2.6cm		口縁端部 凹線2条	にぶい褐色 (7.5YR 6/3)	密 (1mm以下の長石を含む)	良
12	弥生土器 甕	1.7cm		口縁端部 凹線2条	明褐色 (7.5YR 5/6)	密 (1mm以下の石英・長石・雲母を含む)	
13	弥生土器 甕	1.7cm		口縁端部 凹線2条	にぶい褐色 (7.5YR 6/4)	やや密 (1mm以下の長石を含む)	良
14	弥生土器 甕	1.2cm		口縁端部 凹線2条	褐色 (7.5YR 6/6)	やや密 (1mm以下の長石を含む)	良
15	弥生土器 甕	5.6cm 2.6cm	内面 タテヘラケズリ		褐灰 (7.5YR 4/1)	密 (1mm以下の砂粒・雲母を含む)	良
16	弥生土器 甕	5.0cm 1.7cm			にぶい褐色 (7.5YR 6/3)	密 (1mm以下の長石を含む)	良
17	弥生土器 甕	11.0cm 3.0cm	外面 タテヘラミガキ 内面 タテヘラケズリ		灰 (5Y 4/1)	やや密 (1~2mm以下の石英・長石・角閃石を含む)	良
18	弥生土器 甕	8.2cm 2.1cm			灰黄褐色 (10YR 6/2)	密 (1mm以下の長石・雲母を含む)	良
19	弥生土器 高杯	26.2cm 3.0cm			にぶい黄褐色 (10YR 6/3)	やや密 (1~3mmの長石・雲母を含む)	良
20	弥生土器 高杯	15.8cm 1.5cm			にぶい褐色 (5YR 6/4)	密 (1mm以下の長石・雲母を含む)	良
21	弥生土器 高杯	4.4cm	内面 ヨコヘラケズリ		褐色 (5YR 6/6)	粗 (1~2mmの石英・長石を含む)	良
4	外付 -					サヌカイト	
22	右蔵					サヌカイト	
23	右蔵					サヌカイト	
24	外付 -					サヌカイト	

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

高松市東部運動公園(仮称)整備に伴い、当地に所在する埋蔵文化財が消滅してしまうため、事前の発掘調査を行い、記録保存を実施し、今後の文化財の保護ならびに研究に資する必要がある。整備予定地内には、周知の埋蔵文化財としては、全国的に著名な大空遺跡をはじめ、奥ノ坊古墳、スベリ古墳が存在するが、本格的な調査はなされておらず、遺跡の明確な位置および範囲を確定できていない。また、周知の埋蔵文化財以外にも、同様の遺跡が所在する可能性が高い。また、「奥ノ坊」という地名から、寺院の存在する可能性もあり得た。このような、不確定要素ながらも、埋蔵文化財の所在する可能性が非常に高い地域であるため、本格的な発掘調査に先立ち、予定地の埋蔵文化財の分布状況ならびに範囲を明らかにするため試掘調査を実施した。

調査対象地は、47.2haと広大であるため、あらかじめ分布調査を行い、調査範囲のしほりこみを行った。調査対象地内では花崗土の採土等ですでに旧状をとどめていない場所も多く、これらについては、試掘調査対象外とした。また、明らかに遺跡が所在しないような険しい山の斜面部についても調査の対象外とした。

南丘陵地区

大空遺跡、大空南遺跡、スベリ古墳など、丘陵上に立地する集落や後期古墳が存在する。これらの遺跡の範囲確定に主眼を置く。また、同様の遺跡が他の丘陵上に所在する可能性があるため、丘陵頂部および、緩斜面を中心に遺跡の有無確認を行う。

中央平地地区

周知の遺跡は存在しないが、かなりまとまった平坦部分が存在するため、集落や寺院等の遺跡が存在する可能性が高い。これらの遺跡の有無確認を主眼とする。また、旧河道の存在も見込まれ、その埋土中に上部からの遺物の流れ込みがないかを確認する。

北丘陵地区

丘陵の斜面部において後期古墳の奥ノ坊古墳の存在が知られている。同古墳は採土により消滅してしまっているが、同時期の古墳が、数基残存している可能性もあり、古墳の有無確認を主眼とする。また、南向きの緩斜面部は集落を営むのに最適であり、この場所において、遺跡が所在する可能性は極めて高いと思われた。集落の有無確認も重要な点である。

これらの地域に、それぞれの観点から調査を行うのであるが、実際の調査は、丘陵頂部・斜面部については人力、平地部分については重機により掘削を行った。幅1～2m、長さ5～20m程度のトレンチ調査を203ヶ所で行った。

第2節 調査の結果

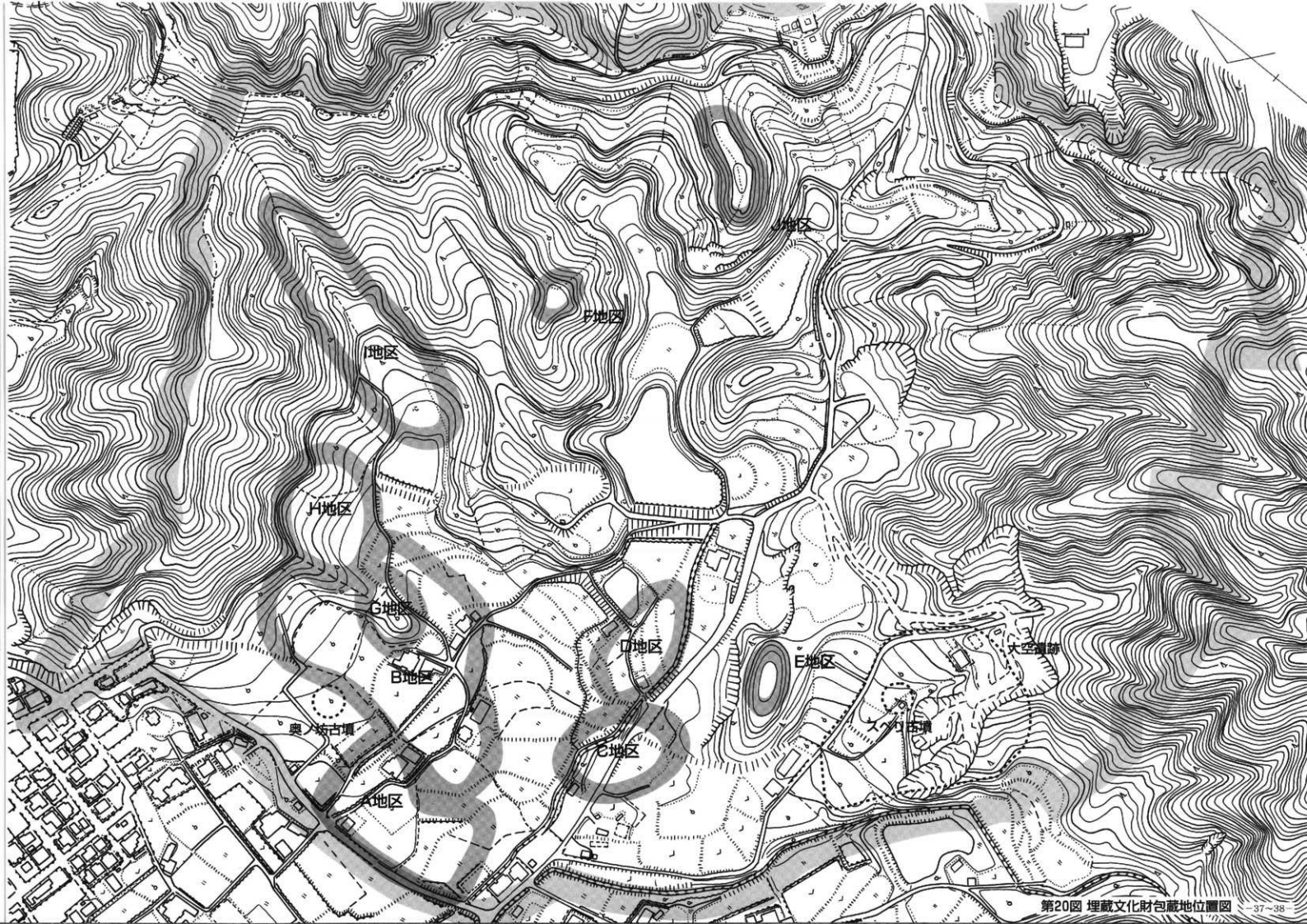
運動公園整備予定地内において203ヶ所におよぶ試掘トレンチを掘削した結果、各所で遺構・遺物を検出することができた。各試掘トレンチの概要は、別表の試掘トレンチ一覧表を参照されたい。

調査対象地は、丘陵裾部であるため、丘陵上部からの流土が多く各トレンチとも約2～3mの掘削を要した。203ヶ所のトレンチ調査でコンテナ5箱分の遺物が出土した。

第8トレンチでは、古墳の周溝と思われる溝を検出しており、須恵器も出土している。第30・31トレンチでは、旧河道を検出し、その埋上中から弥生土器、須恵器、土師器等を検出した。旧河道の最深部で地表面下から約3.5m下がる。第32～35トレンチは、大空遺跡の範囲確認のため調査を行ったもので、弥生土器、石鏃などが出土した。第53～55トレンチでは旧河道埋土中から土師器や陶磁器が出土しているが、遺物量は極めて少ない。第64～67トレンチでは、古墳に伴うと思われる周溝を検出した。第97・102トレンチでも極めて少量ながら遺物が出土している。第107・108トレンチでは、古墳の周溝と思われる溝から須恵器が出土した。周辺でも須恵器が表採されており、さらに数基の古墳が存在した可能性もある。第109～112トレンチでも遺構は検出していないが、遺物だけ少量検出した。第116～118トレンチも同様である。第119・120トレンチは大空遺跡の範囲内であった可能性は高いが、削平されており、遺構は見られなかった。第121トレンチでは須恵器が出土している。スベリ古墳に伴うものと思われる。第122～129トレンチでは、ピット、土坑、旧河道などの遺構が見られ、遺物量も多く、弥生土器をはじめ、須恵器、土師器等が出土した。第133～135トレンチも同様の様相である。第136～142トレンチでは、旧河道なども存在していたが遺物量は極めて少量である。第149～156、159～163トレンチでは、数多くのピット、土坑などの遺構と弥生土器等の遺物を検出した。第172・173トレンチでは遺構は検出できなかったが、弥生土器が多量に出土した。第175トレンチでは溝を検出し、土師器、須恵器が出土した。第178～179トレンチでも検出遺構はないが、弥生土器が出土した。第182トレンチでは土坑を検出し、弥生土器が出土した。第193・194・196・197トレンチではピット等の遺構を検出しており、土師器、陶磁器の他、縄文土器も出土している。第201・202トレンチではピットを検出し、弥生土器も出土している。この他のトレンチについては、遺構・遺物ともに検出していない。

このような試掘調査結果を受け、遺構・遺物の分布密度を考慮した結果、埋蔵文化財蔵地として認定できる場所は、概ね7ヶ所に限定できた。第20図のA～Gの7地点である。この7地区については、今後の保護措置が必要である。周知の埋蔵文化財蔵地である大空遺跡、スベリ古墳、奥ノ坊古墳についてはほぼ消滅していると思われ、本調査の対象外になる。各地区の概要は次にあげていく。

各トレンチの遺構については平面図等の記録をとっているが、今後調査を行うためその時にあわせて報告することにする。ここでは、上に遺物のみをとりあげることにする。



第20图 埋藏文化財包蔵地位圖

表8 試掘トレンチ一覧表 No.1

トレンチ	規模	遺物	遺構	備考
1	2×10=20㎡	出土遺物なし	検出遺構なし	
2	2×5=10㎡	#	#	
3	2×5=10㎡	#	#	
4	1×5=5㎡	#	#	
5	1×5=5㎡	#	#	
6	1×5=5㎡	#	#	
7	1×5=5㎡	#	#	
8	1×5=5㎡	須恵器	溝(周溝)	大空古墳
9	1×5=5㎡	出土遺物なし	検出遺構なし	
10	2×5=10㎡	須恵器、土師器	#	遺物量極めて少量
11	2×5=10㎡	出土遺物なし	#	
12	2×5=10㎡	#	#	
13	2×5=10㎡	#	#	
14	2×5=10㎡	#	#	
15	2×5=10㎡	#	#	
16	2×15=30㎡	#	#	
17	2×15=30㎡	#	#	
18	2×10=20㎡	#	#	
19	2×5=10㎡	#	#	
20	2×5=10㎡	#	#	
21	1×5=5㎡	#	#	
22	1×30=30㎡	#	#	
23	1×5=5㎡	#	#	
24	1×5=5㎡	#	#	
25	1×5=5㎡	#	#	
26	1×5=5㎡	#	#	
27	1×5=5㎡	#	#	
28	1×5=5㎡	#	#	
29	2×10=20㎡	#	#	
30	2×10=20㎡	土師器、須恵器、弥生土器	旧河道	奥の坊権現前遺跡
31	2×20=40㎡	土師器、須恵器	旧河道	#
32	1×5=5㎡	弥生土器	検出遺構なし	大空遺跡
33	1×10=10㎡	弥生土器	土坑	
34	1×5=5㎡	石鏃、弥生土器	検出遺構なし	#
35	1×5=5㎡	弥生土器	ピット	#
36	1×5=5㎡	出土遺物なし	検出遺構なし	
37	1×5=5㎡	#	#	
38	1×5=5㎡	#	#	
39	1×5=5㎡	#	#	
40	1×5=5㎡	#	#	
41	1×5=5㎡	#	#	
42	1×5=5㎡	#	#	
43	1×5=5㎡	#	#	
44	1×5=5㎡	#	#	
45	1×5=5㎡	#	#	

表9 試掘トレンチ一覧表 No.2

トレンチ	規模	遺物	遺構	備考
46	2×30=60m ²	出土遺物なし	検出遺構なし	
47	2×20=40m ²	"	"	
48	1×5=5m ²	"	"	
49	2×10=20m ²	"	"	
50	1×5=5m ²	"	"	
51	1×5=5m ²	"	"	
52	1×5=5m ²	"	"	
53	2×5=10m ²	土師器	旧河道	遺物量極めて少量
54	2×10=20m ²	土師器	旧河道	"
55	2×15=30m ²	土師器、陶磁器	旧河道	"
56	1×5=5m ²	出土遺物なし	検出遺構なし	"
57	1×5=5m ²	"	"	
58	1×5=5m ²	"	"	
59	1×5=5m ²	"	"	
60	1×5=5m ²	"	"	
61	1×5=5m ²	"	"	
62	1×5=5m ²	"	"	
63	1×10=10m ²	"	"	
64	1×5=5m ²	"	溝(周溝)	金川潤古墳
65	1×10=10m ²	"	"	"
66	1×5=5m ²	"	"	"
67	1×5=5m ²	"	"	"
68	1×10=10m ²	"	検出遺構なし	
69	1×5=5m ²	"	"	
70	1×5=5m ²	"	"	
71	2×30=60m ²	"	"	
72	1×5=5m ²	"	"	
73	1×5=5m ²	"	"	
74	1×10=10m ²	"	"	
75	1×10=10m ²	"	"	
76	1×5=5m ²	"	"	
77	1×5=5m ²	"	"	
78	1×5=5m ²	"	"	
79	1×5=5m ²	"	"	
80	1×5=5m ²	"	"	
81	1×5=5m ²	"	"	
82	1×15=15m ²	"	"	
83	1×5=5m ²	"	"	
84	1×5=5m ²	"	"	
85	1×10=10m ²	"	"	
86	1×10=10m ²	"	"	
87	1×10=10m ²	"	"	
88	1×5=5m ²	"	"	
89	1×5=5m ²	"	"	
90	1×5=5m ²	"	"	

表 10 試掘トレンチ一覧表 No.3

トレンチ	規模	遺物	遺構	備考
9 1	1 × 5 = 5 m ²	出土遺物なし	検出遺構なし	
9 2	1 × 10 = 10 m ²	"	"	
9 3	1 × 20 = 20 m ²	"	"	
9 4	1 × 10 = 10 m ²	"	"	
9 5	1 × 5 = 5 m ²	"	"	
9 6	1 × 10 = 10 m ²	"	"	
9 7	1 × 10 = 10 m ²	陶磁器	"	遺物量極めて少量
9 8	1 × 10 = 10 m ²	出土遺物なし	"	
9 9	1 × 10 = 10 m ²	"	"	
100	1 × 20 = 20 m ²	"	"	
101	1 × 10 = 10 m ²	"	"	
102	1 × 10 = 10 m ²	土師器	旧河道	遺物量極めて少量
103	1 × 4 = 4 m ²	出土遺物なし	検出遺構なし	
104	1 × 5 = 5 m ²	"	"	
105	1 × 2 = 2 m ²	"	"	
106	1 × 3 = 3 m ²	"	"	
107	1 × 3 = 3 m ²	須恵器	溝(周溝か?)	奥ノ坊2号墳
108	1 × 2 = 2 m ²	出土遺跡なし	"	"
109	1 × 10 = 10 m ²	陶磁器	検出遺構なし	遺物量極めて少量
110	1 × 10 = 10 m ²	弥生土器	"	"
111	2 × 5 = 10 m ²	瓦器類、弥生土器、土師器	"	"
112	2 × 5 = 10 m ²	弥生土器、土師器	"	"
113	1 × 10 = 10 m ²	出土遺物なし	"	
114	1 × 10 = 10 m ²	"	"	
115	1 × 10 = 10 m ²	"	"	
116	1 × 8 = 8 m ²	弥生土器、土師器、陶磁器	"	奥の坊遺跡
117	1 × 5 = 5 m ²	陶磁器	"	"
118	1 × 5 = 5 m ²	須恵器	"	古墳か?
119	1 × 10 = 10 m ²	弥生土器、サヌカイト	"	大空遺跡(消滅)
120	1 × 10 = 10 m ²	弥生土器、サヌカイト	"	"
121	1 × 10 = 10 m ²	弥生土器、須恵器	"	スベリ古墳(消滅)
122	2 × 10 = 20 m ²	弥生土器	検出遺構なし	奥の坊遺跡
123	2 × 5 = 10 m ²	弥生土器	落ち込み	"
124	2 × 5 = 10 m ²	弥生土器	検出遺構なし	"
125	2 × 20 = 40 m ²	弥生土器	ピット、土坑	"
126	2 × 10 = 20 m ²	弥生土器、須恵器	旧河道	"
127	2 × 20 = 40 m ²	弥生土器、須恵器	旧河道	"
128	2 × 10 = 20 m ²	土師器、須恵器	旧河道	奥の坊権現前遺跡
129	2 × 10 = 20 m ²	土師器、須恵器	旧河道	"
130	2 × 15 = 30 m ²	出土遺物なし	検出遺構なし	
131	2 × 20 = 40 m ²	"	"	
132	2 × 15 = 30 m ²	"	"	
133	1 × 10 = 10 m ²	弥生土器、須恵器	ピット、土坑	奥の坊遺跡
134	1 × 10 = 10 m ²	弥生土器、須恵器	検出遺構なし	"
135	1 × 5 = 5 m ²	弥生土器、須恵器	ピット、土坑	"

表 11 試掘トレンチ一覧表 No.4

トレンチ	規模	遺物	遺構	備考
136	2×10=20㎡	陶磁器	検出遺構なし	遺物量極めて少量
137	2×10=20㎡	陶磁器	"	"
138	2×10=20㎡	陶磁器	"	"
139	2×10=20㎡	弥生土器、陶磁器	旧河道	"
140	2×10=20㎡	弥生土器、陶磁器	旧河道	"
141	2×10=20㎡	弥生土器、須恵器	検出遺構なし	"
142	2×5=10㎡	弥生土器、須恵器	"	"
143	2×15=30㎡	出土遺物なし	"	
144	2×10=20㎡	"	"	
145	2×15=30㎡	"	"	
146	2×10=20㎡	"	"	
147	2×5=10㎡	"	"	
148	2×10=20㎡	"	"	
149	2×5=10㎡	須恵器、土師器	ビット、土坑	奥の坊権現前遺跡
150	2×15=30㎡	土師器	検出遺構なし	"
151	2×15=30㎡	須恵器、土師器	ビット	"
152	2×10=20㎡	弥生土器、須恵器、土師器	ビット、土坑	"
153	2×10=20㎡	弥生土器、須恵器、土師器	ビット	"
154	2×10=20㎡	須恵器、土師器	検出遺構なし	奥の坊遺跡
155	2×20=40㎡	須恵器、土師器	"	"
156	1×10=10㎡	土師器	"	"
157	1×5=5㎡	出土遺物なし	"	
158	1×5=5㎡	"	"	
159	2×20=40㎡	弥生土器	"	奥の坊権現前遺跡
160	2×15=30㎡	弥生土器	ビット、土坑	"
161	2×10=20㎡	弥生土器、須恵器	ビット、溝	"
162	3×15=45㎡	弥生土器	旧河道	"
163	2×15=30㎡	弥生土器	旧河道	奥の坊遺跡
164	1×5=5㎡	出土遺物なし	検出遺構なし	
165	1×5=5㎡	"	"	
166	1×10=10㎡	"	"	
167	2×10=20㎡	"	"	
168	2×15=30㎡	"	"	
169	2×20=40㎡	"	"	
170	2×20=40㎡	"	"	
171	2×10=20㎡	"	"	
172	1×10=10㎡	弥生土器	"	奥の坊権現前遺跡
173	1×10=10㎡	弥生土器	"	"
174	2×20=40㎡	出土遺物なし	"	奥の坊奥池西遺跡
175	2×10=20㎡	須恵器、土師器	溝	"
176	2×10=20㎡	土師器	検出遺構なし	"
177	2×10=20㎡	須恵器	"	"
178	1×5=5㎡	弥生土器	"	奥の坊権現前遺跡
179	1×5=5㎡	弥生土器	"	"
180	2×5=10㎡	出土遺物なし	"	

表 12 試掘トレンチ一覧表 No.5

トレンチ	規模	遺物	遺構	備考
181	2 × 5 = 10m ²	出土遺物なし	検出遺構なし	
182	2 × 15 = 30m ²	弥生土器	土坑	奥の坊奥池西遺跡
183	2 × 15 = 30m ²	出土遺物なし	検出遺構なし	
184	2 × 10 = 20m ²	#	#	
185	2 × 10 = 20m ²	#	#	
186	2 × 30 = 60m ²	#	#	
187	2 × 10 = 20m ²	#	#	
188	2 × 10 = 20m ²	#	#	
189	2 × 20 = 40m ²	#	#	
190	2 × 10 = 20m ²	#	#	
191	2 × 15 = 30m ²	#	#	
192	2 × 20 = 40m ²	#	#	
193	2 × 20 = 40m ²	土師器	ピット	大空北遺跡
194	2 × 10 = 20m ²	出土遺物なし	ピット	#
195	2 × 30 = 60m ²	#	検出遺構なし	
196	2 × 10 = 20m ²	#	ピット	大空北遺跡
197	1 × 10 = 10m ²	縄文土器、陶磁器	ピット、溝	#
198	1 × 10 = 10m ²	出土遺物なし	検出遺構なし	
199	1 × 10 = 10m ²	#	#	
200	1 × 10 = 10m ²	#	#	
201	1 × 4 = 4m ²	弥生土器	ピット	奥の坊遺跡
202	2 × 10 = 20m ²	弥生土器	#	#
203	2 × 10 = 20m ²	出土遺物なし	検出遺構なし	
	合計 2997m ²			

* 網掛け部分については埋蔵文化財包蔵地と認定、保護措置の必要あり。

第3節 各埋蔵文化財包蔵地の概要

1. 周知の埋蔵文化財包蔵地

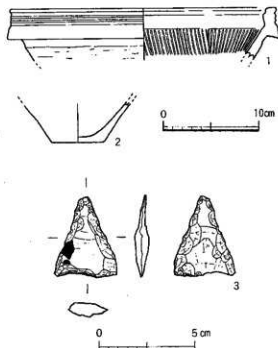
(1) 大空遺跡

大空遺跡周辺は、花崗土の採土により旧状を著しく変えられている。旧状をとどめていると思われた遺跡の南端と東端においてトレンチを掘削した。

遺跡の南端部分では、第32～35トレンチ部分が大空遺跡の範囲内として認められる。第33トレンチでは土坑1基を検出した。同じく第35トレンチではピットを1基検出した。第35トレンチの包含層で出土した土器を右図に掲載した。1は近世の備前焼搦鉢である。2は弥生土器後期の甕の底部である。3は平基式の石鏝で大型のものである。その他、図示できなかったが、各トレンチにおいて弥生後期の土器片が数多く出土した。

東端部分については、第119～121トレンチを掘削したが、ミカン畑開墾により地下げが行われており、遺構は削平されていた。

しかしながら第19図に見られるように遺物は周辺に多く散布しており、かつてこの場所が遺跡の範囲内であったことがうかがえる。遺跡は南端部分を残し、ほぼ消滅しているといつて過言ではない。



第21図 大空遺跡出土遺物実測図

(2) 奥ノ坊古墳

20年ほど前までは北側丘陵部の現在墓地となっている部分に、丘陵が延びており、この丘陵上に位置していたと推定される。奥ノ坊古墳出土の須恵器所有者である澤井喜好氏の話によると、古墳はすでに壊されて存在しないということであったが、周辺にトレンチを入れ確認を行った。古墳に伴う石室や周溝といった諸施設は検出することができず、また、須恵器、土師器などの遺物も認められなかった。奥ノ坊古墳については、完全に消滅したと考えられる。

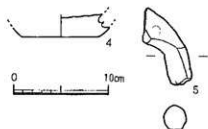
(3) スペリ古墳

この古墳も須恵器が出土したということだけしか分からない古墳である。具体的な位置も不明であったが、大空遺跡の範囲確認のトレンチを掘削したところ、第121トレンチにおいてのみ須恵器が数点出土したため、この位置をもってスペリ古墳の位置とした。しかしながら、大空遺跡の項で触れたように、ミカン畑開墾の際に地下げを行っていることから、石室、周溝などの遺構は検出できなかった。スペリ古墳についても、すでに消滅していると考えられる。

2. 今回発見の埋蔵文化財包蔵地

(1) A地区

A地区は、運動公園整備予定地内の西端で最も低い部分に位置する。妻ヶ谷池や奥池から流れる旧河道埋土中(第30・31トレンチ)から弥生時代から中世に至るまでの遺物が出土している。右図の4は弥生土器の底部である。器壁が厚く、前期のものと思われる。5は中世の土鍋の脚部である。この他、図示できなかったが、弥生中期、後期および6世紀～7世紀頃の土器片が多数出土した。



第22図 A地区出土遺物実測図

この旧河道の北側で、一段高くなっている平坦部分(第149～153, 159～161トレンチ)において多くの遺構を検出した。遺構の中には一辺約90cmの方形の柱穴が見られ、掘立柱建物群が存在する可能性が高い。主に弥生後期～中世の遺物が出土した。

以上の結果、A地区には、概ね弥生～中世の集落とそれに伴う旧河道が存在したと考えられる。

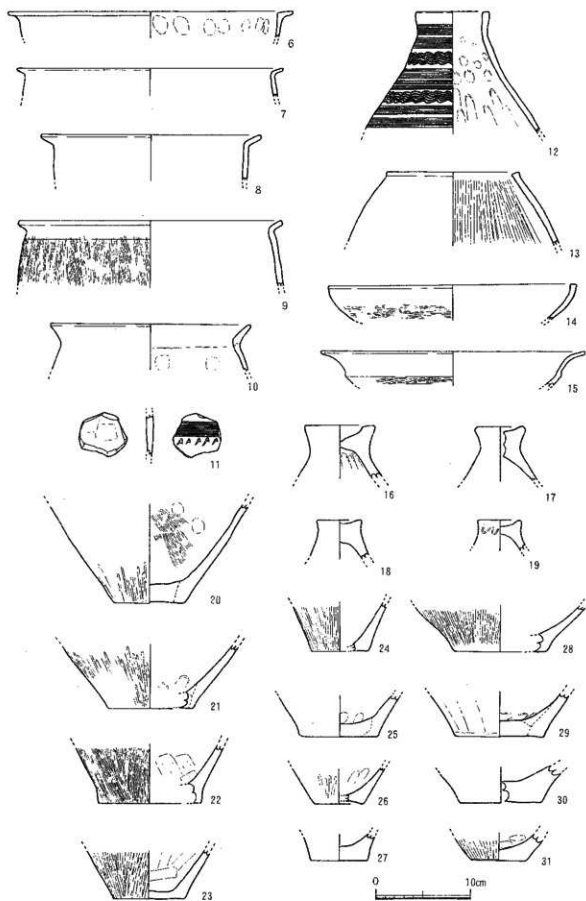
(2) B地区

B地区は、A地区の北東にあたる。墓地区部分が丘陵であったため、東西の丘陵に挟まれた南向きの緩斜面である。

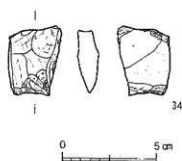
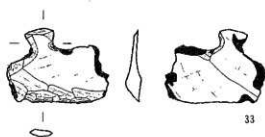
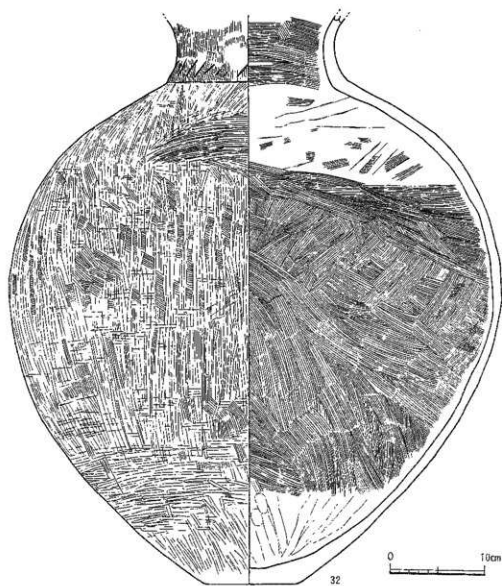
B地区の北西部分(第133～135トレンチ)では、ピットや土坑が認められた。包含層中の遺物から、概ね弥生時代～古代のものと思われる。

南西部分(第122～127トレンチ)は、谷状地形となっており、集落から廃棄された遺物がコンテナ1箱分出土した。主に弥生前期末～中期のものが中心である。第23図6～11は甕である。11は櫛描直線文と列点文が見られる。12は細頸壺である。外面は櫛描直線文2条と波状文1条の繰り返しである。内面は指頭圧や指頭ナデを施す。13は内面タテヘラミガキを施す無頸壺である。14・15は高杯である。14は碗状を呈し、外面ヨコハケを施す。15は外反する口縁を持ち、外面にヨコヘラミガキを施す。16～19は蓋である。20～31は底部である。その他の遺物としては、須恵器が見られた。第25図の35・36である。

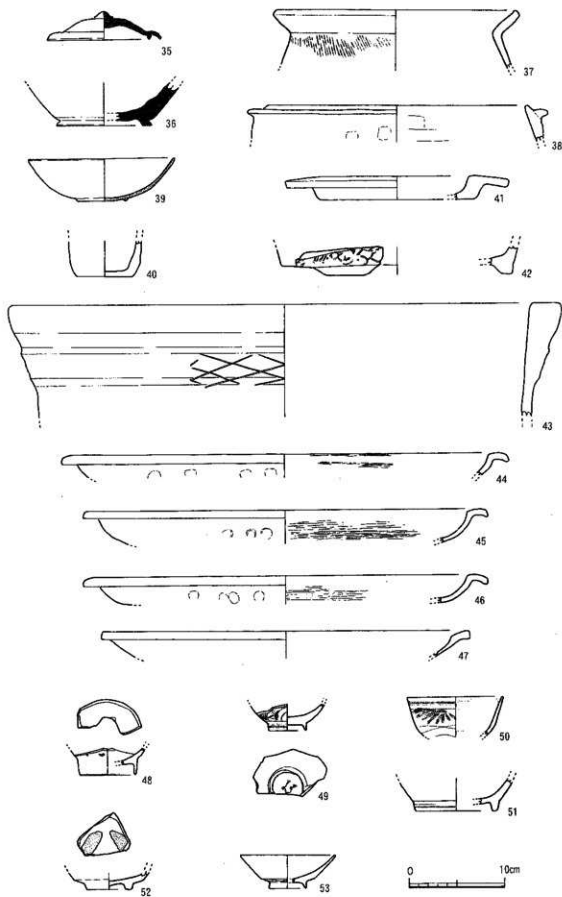
南東部分(第162～163トレンチ)は妻ヶ谷池から流れる旧河道にあたる。第162トレンチでは旧河道の埋土中から弥生後期の土器棺が出土している。旧河道埋土の試掘調査ということで、詳細な図面を取ることなくとりあげたが、旧河道の西側部分に掘り方を持たずに存在した。同様の出土状況は高松平野の蛙股遺跡でも見られる。第24図の32に掲載した。土器棺は、口縁部を打ち欠いた大型の壺である。現存高は59.8cmである。球形に近い体部からやや外反しながら上方へのびる頸部を持つ。頸部にはハケ原体による刺突文が見られる。外面調整は、頸部がタテハケ、体部はタテハケのちタテヘラミガキ、体部下半と上半の一部にヨコヘラミガキが認められる。内面はナデのちタテハケである。打ち欠いた口縁をほぼ東に向け、やや口を上向けにし、体部下半が水平になるような状態で出土した。蓋は存在しなかった。この他、旧河道埋土中には、製塩土器の小片が多く見られた。土器棺と製塩土器のいずれも弥生後期前半のものと思われる。



第23图 B地区出土遗物实测图①



第24图 B地区出土遗物实测图②



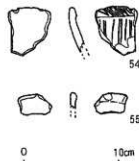
第25图 B地区出土文物实测图③

北東部分は、丘陵裾部にあたり、「元屋敷」という地名が残っていることから、近世の遺構が存在する可能性があった。第116・117トレンチを掘削したが、遺構は認められなかった。しかしながらコンテナ1箱分の遺物が出土している。第24図33・34、第25図37～53である。33はサヌカイト製の石匙である。全体に白く風化が進んでいる。34はサヌカイト製のスクレイパーである。37は土師器の甕で、外面にタテハケを施す。38は土釜である。39は瓦器碗であるが、内外面ともマメツが著しくミガキが認められない。40は備前焼の焼塩壺である。41は土師質の蓋と思われる。精緻な作りである。42は土師質の火鉢である。3方に脚がつくと思われ、外面には型による文様が施されている。文様は不明である。43は土師質の甕である。口縁からやや下がった部分に突帯状の隆起部分が存在する。その凸帯部分に斜格子文が施されている。44～47は焙烙である。44～46については口縁部が屈曲するタイプで、外面指頭圧、内面ヨコハケが認められる。47は口縁部がほとんど屈曲せず、直線的な形態をとる。48～50は肥前系磁器碗である。内外面とも全軸である。草花文等の文様が見られる。51は肥前系磁器壺であると思われる。内面は無軸である。52は肥前系陶器皿である。高台無軸とし、見込みには砂目積の痕跡が見られる。53は肥前系磁器の盃と思われる。出土遺物の時期については、主に18世紀後半～19世紀のものと思われる。

以上のようにB地点内でも4ヶ所に分けることができるが、北西部分の集落とその周辺旧河道を中心とした1つのまとまりとしてとらえることができる。時期については、弥生時代が中心であるが、古代・中世・近世も認められる。

(3) C地区

C地区はB地区の南に位置する。婆ヶ谷池、奥池から流れる旧河道の南側に位置し、丘陵の北側斜面部に立地する。第193・194・196・197トレンチを掘削したところ、ピット多数と溝1条を検出した。遺物は少量であったが、土師器、陶磁器に混じって縄文土器が2点出上している。右図の54・55である。深鉢と思われる。この地点より南西約500mの小山・南谷遺跡において縄文後期の落とし穴等が検出されており、関連遺構が存在する可能性は高い。ピット等が縄文土器に伴うかどうかは不明であるが縄文～近世の包蔵地であることは間違いない。



第26図 C地区出土遺物実測図

(4) D地区

D地区は、C地区の東側に位置し、立地的にはC地区と同様の丘陵北斜面である。第174～177・182トレンチを掘削したところ溝1条と土坑1基を確認した。遺物は、土師器、須恵器が主なものであるが、時期の特定できる遺物は無く、古代～中世頃の遺跡と思われる。図示できるような遺物は出土していない。

(5) E地区

運動公園予定地内では、低地部分に存在する独立丘陵の頂上部に所在するように見受けられるが、本来は大空遺跡から延びる丘陵の延長部分にあたる。周囲の丘陵部が花崗土の採土等

により、切り取られているため、独立丘陵のように見える。標高77.5mに位置する。地元の人々の話では、戦時中にこのあたりに大きな横穴式石室が開口しており、防空壕として利用していたそうである。丘陵の最高所に花崗岩の石が3個見られた。石は原位置を保っているようには見られなかったが、自然石ではなく、四角に加工されているものであった。北側は採土により崩壊しているため、不明であるが、表面で見られる石の下部に安山岩の板石が認められた。マウンド状の盛り上がりは認められなかったが、古墳の可能性が高いと思われた。

試掘トレンチは、花崗岩の石から南に向かって掘削した。周溝と思われる溝を検出でき、埋土中から須恵器の甕の破片が1点出土したが、図示できない。古墳時代後期の円墳であると思われる。

周辺にも同様の遺構が存在する可能性があったが、丘陵上にトレンチを数ヶ所掘削したが、遺構・遺物とも認められなかった。

(6) F地区

丘陵で囲まれる谷状地形の最深部に位置する。北側丘陵部から南に延びる丘陵の先端部分最高所に位置する。標高は96mである。最高所には、花崗岩の石が2個並んだ状態で立っていた。マウンド状の盛り上がりはほとんど見られなかったが、古墳の可能性があった。

石を中心に四方にトレンチを掘削したところ、四方ともに周溝が検出できた。遺物は出土しなかったが、古墳時代後期の円墳であると思われる。周辺部分は採土及び開墾のため地下げが行われており、同様の古墳は存在しないと思われた。

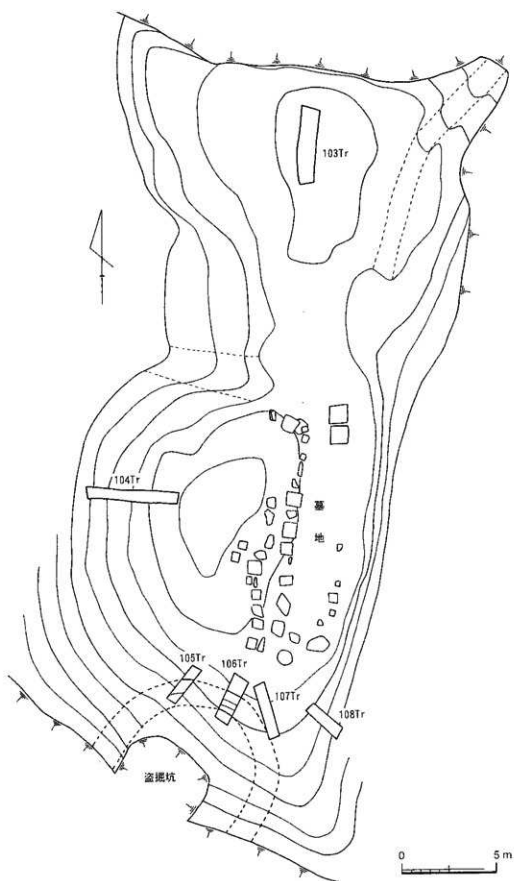
(7) G地区

北側丘陵部から南に延びる丘陵の先端部分に位置する。当初、現地の地形図を視察したところ、この部分の地形が前方後円墳に類似していることに気がついた。現地の分布調査時には、特に留意して調査を行った。丘陵の先端部のみを深さ約1mの溝で区切っており、区切られた部分より先が前方後円形を呈していた。前方後円形の地形の上部は現在、削平され平坦面を有し、草地となっており、地山が露出している。墓石、埴輪などは見られなかったが、前方後円墳の可能性が高いと思われ、試掘調査を実施することになった。

第103～108トレンチを掘削した。第103トレンチは前方部を呈する部分、第104トレンチは後円形西側を掘削したが、腐葉土直下で地山が検出された。後円形の北側を掘削したところ、溝状の遺構が検出され、その埋土中から須恵器片が出土した。溝の延長部分を確認するため、2ヶ所トレンチを掘削した。溝は前方後円形の地形とは反対側に円形に巡ることが判明し、前方後円形の地形の先端に古墳時代後期の円墳があることがうかがえた。周溝で囲まれた部分の中心部分は大きく陥没しており、盗掘坑であろう。その他、後円形の東側部分を掘削したが、ここでも須恵器片が認められただけで、遺構は検出できなかった。

上記の調査結果から、前方後円形に類似した地形であったが、前方後円墳とは言い難い。しかしながら、後期の円墳が所在していることがうかがえ、さらに周辺にも同様の古墳が存在する可能性もある。

なお、前方後円形の平坦面に存在する墓地が移転したときには、再度、平坦部分にトレンチを入れ、古墳であるかどうかの最終確認は行う予定にしている。



第27図 奥ノ坊2号墳局辺試掘トレンチ平面図

(8) A～G地区以外の包蔵状況

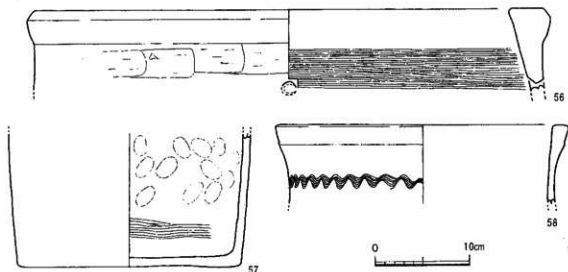
A～G地区については、先に述べた通り、ほぼ遺構と遺物の両者が出土しているが、それ以外の地区については、遺構が見られず遺物のみ出上している場所が数ヶ所認められた。

まず、I地区であるが、現状はミカン畑となっており、旧地形を改変されている恐れはあったが、B地区同様、南向きの斜面である。B地区に比べると、やや急な斜面を呈する。この地区についても集落等の遺跡が所在する可能性が高いと思われたが、試掘調査の結果、遺構は存在しなかった。現地表面下約3mで地山となるが、地山の直上に黒褐色粘質土層の堆積が認められた。この黒褐色粘質土層中からは、微量ながら弥生土器、須恵器、土師器、瓦等の遺物が出上した。

次にI地区であるが、数ヶ所のトレンチを設定し、掘削したところ、竈ヶ谷池に流れ込む自然河道を検出した。現地表面下約4mまで掘削したが、河底は検出できなかった。この旧河道上中からは近世の土師質土器が数点出上している。図示できたものを第28図に掲載した。56は甕である。口縁部を少し拡張させ、上面に面を持つ。頸部に焼成前の穿孔が残存部分で1ヶ所見られる。頸部外面は断続的なヨコハケ方向のヘラケズリを施している。内面はヨコハケである。57・58は火鉢である。57は平底で体部はまっすぐ立ちあがる。内面上半に指頭圧、下半にヨコハケを施す。58はやや外反する口縁を持つ。頸部外面に波状文を施す。その他、陶磁器片、土師器片が出土しており、概ね近世でも後半頃のものと考えられる。

J地区では、女鉢宮社と呼ばれる小さな祠の下部施設が残存していた。祠自体は、現在他の場所に移設してあるが、当初この地に祠があったことがうかがえる。現状は、周辺部分がかなり削平され、祠のあった場所付近しか旧状をとどめていないと思われた。地元の人話では女鉢宮社で雨乞いが行われていたそうで、それに関する遺構、遺物が期待できた。また女鉢宮社の建立年を知るために、周辺にトレンチを設定し、掘削した。遺構は検出できず、遺物も、第28図56と同じタイプの甕が1点出土しただけである。また祠の下部には古墳などの施設が期待されたが、検出できなかった。

A～G、H～J地区以外においても、土器の小片程度であれば、各所で出土した。しかしながら、流れ込みであったり、極めて少量であるため、ここではとりあげない。丘陵部においては、丘陵頂部を中心に多数トレンチを掘削したが、遺構、遺物とも全く認められなかった。



第28図 I地区出土遺物実測図

第4章 まとめ

運動公園整備予定地内の各所で、遺構、遺物を多数検出しており、概要については先述したとおりである。概要を簡単にまとめると、調査対象地内の丘陵部分については、全くといっていいほど埋蔵文化財包蔵地は所在せず、婆ヶ谷池、奥ノ池から流れる自然河道の両岸に集中して所在する。特に集落遺跡についてその傾向が強い。さらに自然河道の南岸よりも北岸に所在するA・B両地区の遺構、遺物量が多く、かなりの規模の遺跡が所在する可能性が高い。A・B地区については、南向きの緩斜面で、集落には最適の場所と言える。これに対し南岸のC・D地区は、やや規模の小さい集落であった可能性が高い。しかしながら、C地区では、縄文後期の土器片などが出土しており、興味深い地区である。

これに対し、丘陵部と言えば、E・F・G地区のように、単独で古墳が所在するだけである。当初期待した丘陵頂部での前期古墳や高地性集落などは検出されなかった。平野部から奥まりすぎていることが原因であろうか。

以上のような包蔵状況から、A～G地区については、遺構が検出されており、F地区を除くと遺物も併伴していることから、埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととした。このため、これらの地域については、事前の保護措置が必要となる。H～J地区については、遺構が検出されておらず、遺物量も少ないため、包蔵地としては取り扱わない。

各包蔵地の名称であるが、字名等を取り、A地区を奥の坊権現前遺跡、B地区を奥の坊遺跡、C地区を大空遺跡、D地区を奥の坊池西遺跡、E地区を大空古墳、F地区を金川湖古墳、G地区を奥ノ坊2号墳と今後呼称する。また、これらを総称して奥の坊遺跡群とする。

また、周知の埋蔵文化財包蔵地である、大空遺跡、奥ノ坊古墳、スベリ古墳については、削平を受け消滅してしまっていると思われるため、今回保護措置は特に必要無いと思われる。工事の際には周辺部分については慎重な工事が望まれる。

〈参考文献〉

- 大嶋和則 「奥の坊遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』香川県教育委員会 1996
大嶋和則 「奥ノ坊地区」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度』香川県教育委員会 1997

表13 出土遺物観察表 ①

番号	器 種	法口径 口径 器高	調 整	文 様	色 調	胎 土	焼 成
1	備前焼 横鉢	27.4cm 5.5cm	外面 ヨコヘラケズリのちナデ	内面 17条一束の描目	黒褐 (10YR 3/2)	やや密 (1mm以下の石英・長 石を含む)	良 好
2	弥生土器 甕	5.5cm 5.0cm	マメツのため調整不明		にぶい黄褐 (10YR 4/3)	やや粗 (1mm以下の石英・長 石を含む)	良
3	石蔵					サヌカイト	
4	弥生土器 壺	8.0cm 20.5cm	マメツのため調整不明		灰黄 (2.5Y 7/2)	やや粗 (1~3mmの石英・長石 を含む)	良
5	土師器 土鍋	8.0cm	指頭圧		にぶい黄褐 (10YR 6/3)	やや粗 (2mm以下の石英・長 石を含む)	良
6	弥生土器 甕	30.0cm 2.9cm	外面 ナデ 内面 指頭圧		にぶい褐 (7.5YR 5/4)	やや粗 (1~2mm以下の石英・ 長石・雲母を含む)	不 良
7	弥生土器 甕	27.8cm 3.0cm	マメツのため調整不明		橙 (7.5YR 7/6)	やや密 (1mm以下の石英・長 石を含む)	良
8	弥生土器 甕	23.0cm 4.8cm	マメツのため調整不明		黒褐 (2.5Y 3/1)	やや密 (2mm以下の石英・長 石を含む)	良
9	弥生土器 甕	27.6cm 7.0cm	外面 タテハケ 内面 ナデ		橙 (5YR 7/6)	やや密 (2~3mmの石英・長石 を含む)	良 好
10	弥生土器 甕	21.0cm 4.9cm	外面 ナデ 内面 指頭圧		灰黄褐 (10YR 5/2)	やや密 (1mm程度の石英・長 石を含む)	良
11	弥生土器 甕	4.6cm	外面 ナデ 内面 板ナデ	外面 11条一束の描 直線文1条 列点文	黄褐 (10YR 5/4)	やや粗 (2mm以下の石英・長 石を含む)	良
12	弥生土器 細頸甕	7.5cm 12.8cm	外面 ナデ 内面 指頭圧、指頭ナデ		明赤褐 (5YR 5/6)	やや密 (3mm以下の石英・長 石を含む)	不 良
13	弥生土器 無頸甕	14.0cm 7.8cm	外面 ナデ 内面 タテヘラミガキ		橙 (5YR 6/6)	粗 (1~2mm以下の石英・ 長石を含む)	良
14	弥生土器 高杯	25.0cm 3.7cm	外面 ヨコヘラ 内面 ナデ		灰褐 (5YR 5/4)	やや密 (1mm程度の石英・長 石を含む)	良
15	弥生土器 高杯	27.6cm 3.6cm	外面 ヨコヘラミガキ 内面 ナデ		にぶい褐 (7.5YR 5/4)	密 (1mm以下の石英・長 石を含む)	良 好
16	弥生土器 蓋	7.2cm 5.7cm	外面 ナデ 内面 指頭圧		黄褐 (7.5YR 5/8)	やや粗 (2mm以下の石英・長 石・雲母を含む)	良 好
17	弥生土器 甕	5.0cm 5.8cm	マメツのため調整不明		にぶい赤褐 (5YR 5/4)	やや粗 (1~2mmの石英・長石・ 雲母を含む)	良
18	弥生土器 蓋	4.6cm 4.2cm	マメツのため調整不明		橙 (7.5YR 7/6)	やや粗 (2mm程度の石英・長 石を含む)	良
19	弥生土器 蓋	4.5cm 3.3cm	外面 指頭圧 内面 ナデ		黄橙 (10YR 8/6)	やや粗 (2~3mmの石英・長石 を含む)	良
20	弥生土器 甕	7.2cm 10.4cm	外面 タテヘラミガキ 内面 指頭圧のちタテハケ		にぶい赤褐 (5YR 5/4)	密 (2mm以下の石英・長 石を含む)	良
21	弥生土器 甕	8.8cm 6.7cm	外面 タテヘラミガキ 内面 指頭圧		にぶい橙 (7.5YR 7/4)	やや粗 (1~2mmの石英・長石 を含む)	良
22	弥生土器 甕	10.8cm 6.1cm	外面 タテハケ 内面 タテヘラケズリ		にぶい黄橙 (10YR 6/3)	密 (1~3mmの石英・長石・ 雲母を含む)	良

表14 出土遺物観察表 ②

番号	器種	法口径 底径 器高	調 整	文 様	色 調	胎 土	焼 成
23	弥生土器 甕	7.6cm 5.1cm	外面 タテヘラミガキ 内面 板ナデ		にぶい赤褐色 (2.5YR 4/4)	密 (1mm以下の石英・長石を含む)	良
24	弥生土器 甕	5.9cm 5.1cm	外面 タテヘラミガキ 内面 ナデ		明赤褐色 (2.5YR 5/6)	やや粗 (15mm以下の石英・長石を含む)	良
25	弥生土器 甕	7.4cm 4.4cm	外面 マメツのため 調整不明 内面 指頭圧		褐色 (5YR 7/6)	やや粗 (2~3mmの石英・長石を含む)	良
26	弥生土器 甕	5.2cm 3.7cm	外面 タテヘラミガキ 内面 指頭ナデ		にぶい褐色 (7.5YR 6/4)	密 (1~2mmの石英・長石・雲母を含む)	良
27	弥生土器 甕	5.9cm 2.8cm	マメツのため調整不明		赤 (10R 5/6)	やや粗 (1~3mm以下の石英・長石を含む)	良
28	弥生土器 甕	9.6cm 4.3cm	外面 タテヘラミガキ 内面 ナデ		灰褐色 (7.5YR 4/2)	やや粗 (1~3mm以下の石英・長石・雲母を含む)	良
29	弥生土器 甕	9.2cm 4.7cm	外面 板ナデ 内面 指頭圧		にぶい黄褐色 (10YR 6/3)	やや密 (3mm以下の石英・長石を含む)	良 好
30	弥生土器 甕	8.6cm 3.8cm	マメツのため調整不明		褐色 (5YR 7/8)	粗 (1~3mm以下の石英・長石を含む)	良
31	弥生土器 甕	5.3cm 2.8cm	外面 タテヘラミガキ 内面 指頭圧		褐色 (7.5YR 7/6)	粗 (1~3mm以下の石英・長石を含む)	良
32	弥生土器 甕	9.9cm 59.8cm	外面 ハケのちミガキ 内面 ナデのちハケ	頸部外面 刺突文	にぶい褐色 (7.5YR 7/3)	密 (3mm以下の石英・長石を含む)	良 好
33	石甕					サヌカイト	
34	スクレイパー					サヌカイト	
35	須恵器杯 蓋	12.0cm 3.0cm	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ		黄灰 (10YR 6/1)	やや密 (2mm以下の石英・長石を含む)	良
36	須恵器広 口壺	10.0cm 4.0cm	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ		灰 (5Y 6/1)	粗 (1~2mm以下の石英・長石を多く含む)	良 好
37	土師器 甕	24.0cm 5.6cm	外面 タテハケ 内面 ナデ		にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	やや密 (1~2mmの石英・長石を含む)	良
38	土師器 土甕	28.0cm 3.9cm	外面 指頭圧 内面 板ナデ		灰白 (10YR 8/2)	密 (1mm以下の石英・長石を含む)	良
39	瓦器 椀	5.1cm 4.5cm	マメツのため調整不明		灰 (N 5/)	密 (1mm以下の長石を含む)	良
40	備前焼 甕	5.6cm 3.8cm	外面 ナデ 内面 ナデ		灰赤 (10R 5/2)	やや密 (1mm以下の石英・雲母を含む)	良
41	土師器 甕	15.8cm 2.5cm	外面 ナデ 内面 ナデ		褐色 (7.5YR 6/6)	やや密 (1mm以下の石英・長石を含む)	良
42	土師器 火鉢	24.0cm 2.9cm	外面 ナデ 内面 ナデ		にぶい黄褐色 (10YR 5/3)	密 (1mm以下の石英・長石を含む)	良 好
43	土師器 甕	58.0cm 12.1cm	外面 ナデ 内面 ナデ	外面 斜格丁文	にぶい褐色 (7.5YR 6/6)	やや密 (1~3mm以下の石英・長石を含む)	良 好
44	瓦質土器 焙烙	47.0cm 2.4cm	外面 指頭圧 内面 ヨコハケ		黒 (10YR 2/1)	密 (1mm以下の石英・長石を含む)	良 好

表15 出土遺物観察表 ③

番号	器種	法口径 底径 器高	調 整	文 様	色 調	胎 土	焼 成
45	瓦質土器 埴輪	40.0cm 3.5cm	外面 指頭圧 内面 ヨコハケ		灰黄 (2.5Y 7/2)	やや密 (1mm以下の雲母を含む)	良
46	瓦質土器 埴輪	39.0cm 2.9cm	外面 指頭圧 内面 ヨコハケ		褐灰 (10YR 4/1)	密 (1mm以下の石英・長石・雲母を含む)	良
47	瓦質土器 埴輪	38.6cm 2.8cm	外面 ナデ 内面 ナデ		黒 (2.5Y 2/1)	密 (1mm以下の石英・長石・雲母を含む)	良 好
48	肥前系磁 器碗	5.8cm 2.8cm	全輪	外面 染付文様不明 内面 染付文様不明		密	良 好
49	肥前系磁 器碗	3.8cm 2.8cm	全輪	外面 草花文 高台内 窯記号		密	良 好
50	肥前系磁 器碗	10.0cm 4.2cm	全輪	外面 圓線・草花文 内面 圓線		密	良 好
51	肥前系磁 器壺	8.4cm 3.4cm	内面 無輪	外面 圓線		密	良
52	肥前系陶 器皿	4.8cm 1.8cm	高台 無輪 砂目積			密	良 好
53	肥前系磁 器壺	4.0cm 3.5cm	全輪			密	良
54	縄文土器 深鉢		マメツのため調整不明	外面 線刻	褐灰 (7.5YR 4/1)	密 (1~2mm以下の石英・長石を含む)	良
55	縄文土器 深鉢		マメツのため調整不明		にぶい黄 (2.5Y 6/3)	やや密 (2mm以下の石英・長石を含む)	良
56	土師器 甕	53.6cm 8.7cm	外面 ヨコヘラケズリ 内面 ヨコハケ	頸部 焼成前の穿孔	灰褐 (7.5YR 4/2)	やや密 (1mm程度の石英・長石を含む)	良
57	土師器 甕	23.4cm 14.0cm	外面 ナデ 内面 指頭圧 ヨコハケ		にぶい黄 (7.5YR 5/3)	やや粗 (1~2mm以下の石英・長石を含む)	良
58	土師器 甕	29.6cm 8.3cm	外面 ナデ 内面 ナデ	外面 波状文	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	やや密 (1~3mmの石英・長石を含む)	良

大 空 古 墳

第1章 調査の経緯と経過

大空古墳は高松市高松町大空に所在する古墳で、高松市東部運動公園(仮称)整備に伴う事前の試掘調査で新たに確認された古墳である。

高松市東部運動公園(仮称)整備に伴い、同地に所在する埋蔵文化財包蔵地については事前の保護措置が必要である。大空古墳の所在する丘陵頂部については、運動公園の造成段階において削平されるため、記録保存を行うことで公園緑地課と合意した。

現地調査は平成8年2月14日～2月23日の実働8日間で行った。調査面積は約150㎡である。整理作業については平成9年1月～3月に行った。



第29図 大空古墳位置図

調査日誌抄

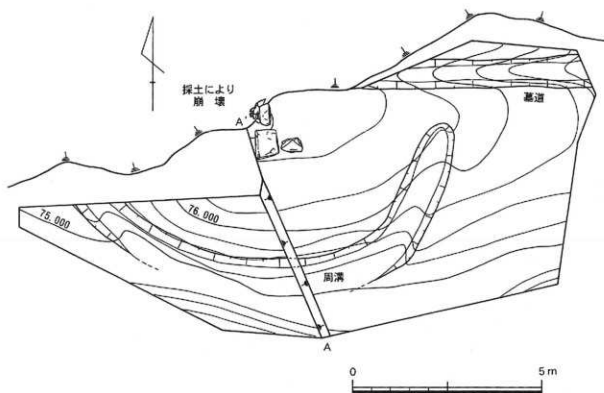
- 2月14日 調査開始。露出石材の実測を行う。
- 2月16日 表土剥ぎ。表土直下で地山検出。古墳断面図作成。
- 2月20日 古墳の平面測量を行う。径約11mの円墳であることを確認。
- 2月23日 埋め戻し。調査終了。

第2章 調査の成果

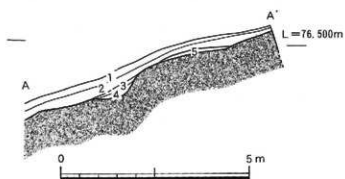
大空古墳は、現在独立丘陵の頂上部に立地するように見受けられるが、本来は大空遺跡から北へ延びる丘陵の延長部にあたる。大空古墳が残存する部分以外は花崗土の採土で切り取られており、古墳自体も北側半分については採土により崩壊している。周辺には周知の埋蔵文化財包蔵地であるスベリ古墳が存在していたようであるが、試掘調査結果によるとすでに消滅してしまっているようである。

大空古墳は標高77.5mの高所に位置し、付近の水田面との比高差は約35mである。現状は3個の石材がL字状に露出しているだけで、マウンド状の盛り上がりは認められなかった。調査区は露出石材を中心に設定した。

採土による崩壊のため古墳の南半部分のみの調査となったが、径8.50m、周溝を含めた全長約11mの円墳を検出することができた。盛土は一部薄く認められたが、すでにほぼ流出してしまっていた。古墳の周囲には東側を開口した形で周溝が運ることがうかがえた。周溝、幅1.25m、深さ0.50mを測り、埋土は2層に分層できた。周溝の埋土下層において試掘調査時に須恵器甕体部破片1点、本調査時に1点の計2点が出土した。周溝の途切れた東側では、墓道と思われる溝が東へ向かって延びている。幅1.00m、深さ0.30mを測る。ここからも須恵



第30図 大空古墳平面図

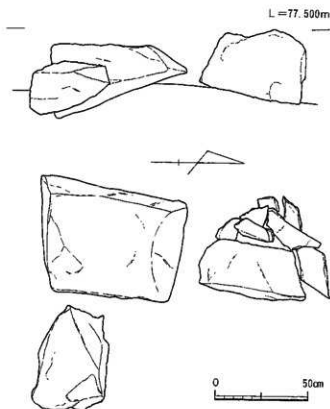


1. 腐葉土
2. 灰白色 細砂
3. 灰色 シルト質極細砂
4. 黄灰色 粘質シルト
5. 黄灰色 粘土(墳丘盛土)

第31図 大空古墳断面図

器甕体部破片1点が出土した。周溝、墓道出土の須恵器の甕は外面タタキ、内面同心円の当て具痕を残すもので、時期については不明である。

露出している3個の石材は全て花崗岩で、最大のもので長さ70cmを測る。立面図を見ると、底面のレベルが一定でなく、原位置を保っていないと思われるが、おそらく石室に使用された石材であろう。また、これら3個の石材の下部で6枚の安山岩の板石が採土により崩壊した箇所断面にささった状態で露出している。すべて墓道の底面と同レベルで水平に寝た状態であり、石室の床に敷かれたものであった可能性が高い。この安山岩に関しては、原位置を保っている可能性もある。



第32図 大空古墳石室平・立面図

図面は掲載しなかったが、大空古墳周辺、特に南斜面にトレンチを設定し削平したが、古墳およびその他の遺構は検出できなかった。

第3章 まとめ

検出した墓道が東に延びることから、東向きに開口した横穴式石室が存在したと思われる。太平洋戦争中には、石室を防空壕として利用していたと地元の人が語っており、一家族が入れる程度の大きさだったそうである。現在は、盛土も石室もなく、不明な点が多い。

遺物も須恵器の甕の体部破片3点のみが出土しているだけで、詳細な時期決定はできないが、概ね古墳時代後期～終末期のものであろう。

〈参考文献〉

大嶋和則 「大空古墳」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』香川県教育委員会1996

金 川 溯 古 墳

第1章 調査の経緯と経過

金川測古墳は高松市高松町金川測に所在する古墳で、高松市東部運動公園(仮称)整備に伴う事前の試掘調査で新たに確認された古墳である。

高松市東部運動公園(仮称)整備に伴い、同地に所在する埋蔵文化財包蔵地については事前の保護措置が必要である。金川測古墳の所在する丘陵頂部については、運動公園の造成段階において、削平されるため、記録保存を行うことで公園緑地課と合意した。

現地調査は平成8年2月26日～3月8日の実動9日間で行った。調査面積は約300㎡である。整理作業については平成9年1月～3月に行った。



第33図 金川測古墳位置図

調査日誌抄

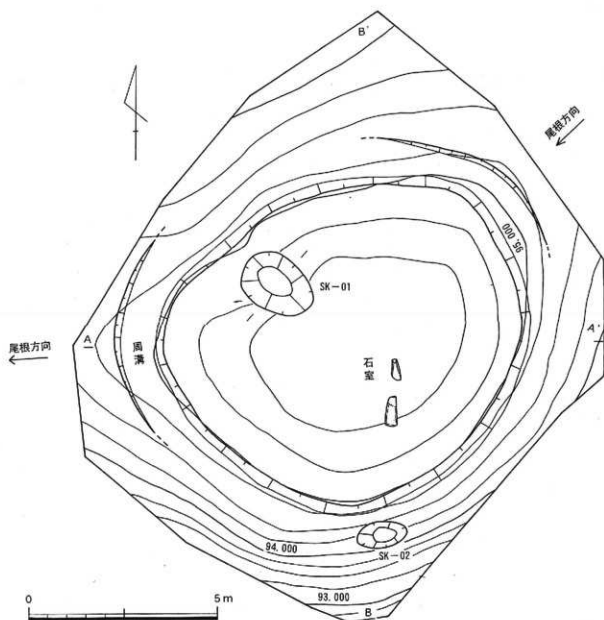
- 2月26日 調査開始。積雪のため雪かきを行う。
- 2月27日 樹木伐採。北東部分より表土剥ぎを行う。
- 2月28日 土坑検出。土坑内より炭、土器片出土。
- 3月4日 古墳の断面図作成。
- 3月5日 古墳の平面測量を行う。
- 3月8日 埋め戻し。調査終了。

第2章 調査の成果

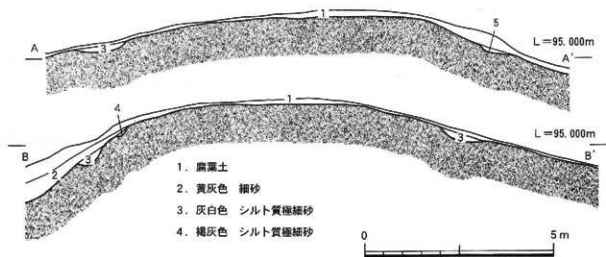
金川測古墳は、運動公園整備予定地内でも最も奥まった部分に位置する。北側丘陵部から南に延びる丘陵の先端部最高所に位置する。標高は96mで、付近の水田面との比高差は約50mである。現状では尾根に斜行するように花崗岩が縦に2個並んでいるが、マウンド状の高まりは見られない。花崗岩の石を中心に調査区を設定した。

掘削を行ったところによると、表土直下で地山を検出しており、盛土は認められなかった。丘陵の尾根方向のみに幅1.30m、深さ0.20mの周溝を設けている。周溝から推定すると、径約10mの円墳と思われる。墓壇は地山まで掘り込んで作られていたが、浅く落ち込む程度で、ほとんど残存はしない。石室を構成していたと思われる石材は露出していた2点のみしか検出されず、規模等は不明である。

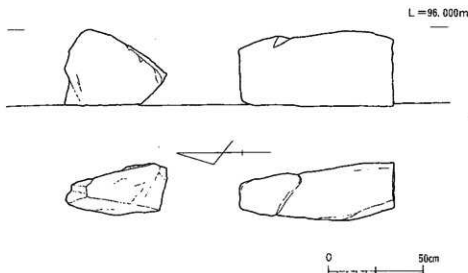
墳丘上および墳丘南裾部分において土坑を検出した。特に墳丘上のSK-01は埋土中に炭を多量に含み、須恵器片も1点出土している。小片のため図示できないが甕の体部破片である。



第34図 金川渚古墳平面図



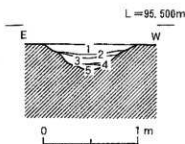
第35図 金川渚古墳断面図



第36図 金川湖古墳石室平・立面図

墳丘南裾部の土坑については遺物は出土していない。

なお、尾根上に同様の古墳が存在する可能性があるためトレンチを掘削したが、古墳およびその他の構造とも見られなかった。



1. 7.5Y6/1 灰 細砂
2. 5Y5/1 灰 シルト質微細砂(炭多く含む)
3. 5Y8/1 灰白 細砂
4. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質粘土
5. 2.5Y7/1 灰白 粗砂

第37図 SK-01断面図

第3章 まとめ

検出した花崗岩は、石室東側壁の基底石にあたると思われる、石材が南北方向に並んでいることから石室は南に開口していたと思われる。遺物はSK-01出土の須恵器の小片1点のみで、古墳の築造時期を決定するには至らない。

周辺部の調査で古墳が検出されておらず、周知の埋蔵文化財包蔵地も所在しないことから、丘陵頂部に単独で存在した可能性が高い。

〈参考文献〉

大嶋和則 「金川湖古墳」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』香川県教育委員会1996

写真図版



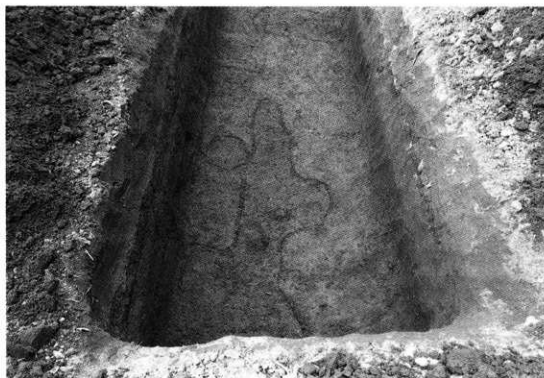
1. 調査風景(機械堀削)



2. 調査風景(人力堀削)



3. 大空遺跡現況



4. 大空北遺跡遺構検出状況



5. 奥の坊奥池西遺跡遺構検出状況



6. 奥の坊権現前遺跡遺構検出状況



7. 奥の坊遺跡遺構検出状況



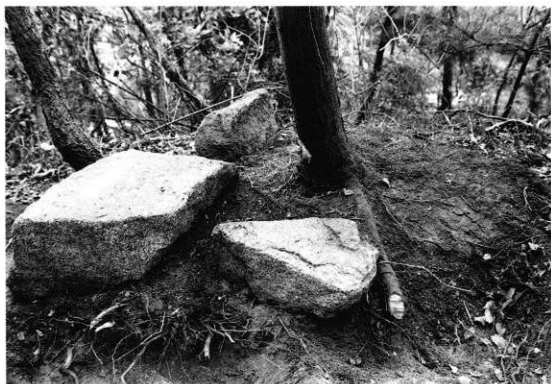
8. 奥の坊遺跡遺構検出状況



9. 奥の坊遺跡土器棺出土状況



10. 奥の坊遺跡出土土器棺



11. 大空古墳石材露出状況(南から)



12. 大空古墳石材露出状況(北から)



13. 大空古墳作業風景



14. 大空古墳完堀状況(東から)



15. 大空古墳墓道土層断面(東から)



16. 金川測古墳石材露出状況(北から)



17. 金川湖古墳完掘状況(南から)



18. 金川湖古墳SK-01土層断面(北から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	おくのぼういせきぐんいち (おくのぼうちく おおそらこふん かながわぶちこふん)							
書名	奥の坊遺跡群Ⅰ (奥ノ坊地区(試掘) 大空古墳 金川湖古墳)							
副書名	高松市東部運動公園(仮称)整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第1冊							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第40集							
編著者名	大嶋和則							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町1丁目8番15号 TEL087-839-2636							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °'〃	東経 °'〃	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
おくのぼうちく 奥ノ坊地区	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 たかまつちよう 高松町	37201		34° 19' 30"	134° 7' 30"	95,08,04 ～ 97,10,08	2,997	運動公園
おおそらこふん 大空古墳						96,02,14 ～ 96,02,23	150	運動公園
かながわぶちこふん 金川湖古墳						96,02,26 ～ 96,03,08	300	運動公園
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
奥ノ坊地区		縄文 弥生 奈良 室町 江戸	ビット、土坑 ビット		縄文土器 弥生土器、石器 土師器、須恵器 土師器 陶磁器			
大空古墳	古墳	古墳			須恵器			
金川湖古墳	古墳	古墳			須恵器			

高松市東部運動公園(仮称)整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

第1冊

奥の坊遺跡群Ⅰ
(奥ノ坊地区(試掘))
(大金川湧占墳)

平成11年3月31日

編集 高松市教育委員会
高松市番町1丁目8番15号
発行 高松市教育委員会
印刷 協平和晃版社